

仮面ライダーカブト feat. ラブライブ！ School idol hero

フミヤノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダーカブトfeat. ラブライブ！
School
idol hero

スクールアイドルグループ『μ's』のメンバー西木野 真姫
彼女の前に一人の男が突然現われた！

男の名は…

天の道を往き、総てを司る男…

―天道 総司―

最強の俺様『天道 総司』、最強のスクールアイドル『西木野真姫』

!!

総てを超越し本物のヒーロー&ヒロインが現われる

。。。。。。 ナニソレイミワカンナイ 人人甘―甘人人

皆様どうもはじめまして「ファミヤノ」と申します。この作品は『仮面ライダーカブト』と『ラブライブ』のクロスオーバー作品です。私の大好きなヒーロー&ヒロイン、『天道総司』の戦いの日々と『西木野真姫』のスクールアイドルとしての日常を中心に描く青春学園ヒロイツクストーリー！初心者でつたない文章や様々な原作ネタが多々ある妄想全開の本作品で誠に恐縮ですが是非御愛読の程よろしくお願ひします。

目次

登場人物紹介	1
#1 最強男との出逢い	4
#2 ヘンシンシチャツタノオ!	16
#3 守りたいものは	31
#4 闇キツチンμ's編	48
#5 N I C O i s S H O W T I M E	62
#6 魔法使い《ウイザード》はじめました!	73
#7 希望のうた	85
SS #1 「お兄ちゃんと呼びたくて・・・」	108
SS #2 「天道の憂鬱・・・」	113
SS #3 「賢い カワイイ ○○○」	115
SS #4 「Ring a yellow THEBEE」	117
SS #5 「蒼の銃弾く園田海未は未来の風く」	124
SS #6 「バイオレットスコピオン」	131
SS #7 「再開! 剣と加賀美と・・・」	137

登場人物紹介

ナレーション

「以下は、あくまで本作品のみに設定されたできごとであり、作者『フミヤノ』の妄想の世界での話である・・・」

天道総司／仮面ライダーカブト・・・主人公

自らを「天の道を往き、総てを司る男」と自称する破天荒で型破りな青年。自分が世界で一番偉いと本気で思っている。TVシリーズ本編最終回後、つまり「ワーム」、「ネイティブ」との最終決戦を終えた後、秘密組織『ZECT』を解体・再編成し自らが新ZECTのトップとして君臨し「ワーム」、「ネイティブ」の残党から人々を守る為に密かに闘いの日々を送っていたところ、スクールアイドルグループ『μ, s』のメンバー西木野真姫の家で料理人として奉公することになる。

西木野真姫／μ, sメンバー・・・メインヒロイン

一年生。μ, sの作詞担当、西木野総合病院の跡取り娘。天道総司との出会いを境『ワーム』との戦いに巻き込まれつつも、スクールアイドルとしての活動に励んでいる。

高坂穂乃果／μ, sメンバー

二年生。μ, sの発起人&リーダー。口癖は『ファイトだよ!』

南ことり／μ, sメンバー

二年生。μ, sの衣装担当。音ノ木坂学院理事長の娘。

園田海未／μ, sメンバー／仮面ライダードレイク

二年生。μ, sの作詞担当。得意技は顔芸&ラブアローシユート(妄想の中で)・・・のはずがSS#5にて風間大介からドレイクの後継者として選ばれ襲ってきたワーム対しにラブアローシユート(ライダーシユートイニング)をしてしまう!

絢瀬絵里／μ, sメンバー

三年生。メンバーの頼れるお姉さん「かしこい カワイイ エリーチカ」

東條希／μ，sメンバー

三年生。タロットカード占いが得意なμ，sの母親的存在。『μ，s』の名付親。

矢澤にこ／μ，sメンバー

三年生。アイドルとしての想いがメンバー内で一番強いアイドル研究部部长。真姫とはカップリング的ネタにされる。

小泉花陽／μ，sメンバー

一年生。真姫から声が綺麗と評価されるだけの美声の持ち主音ノ木のアルパカ使い！ダレカタスケター！

星空凛／μ，sメンバー／仮面ライダーザビー

一年生。メンバー内での運動神経はピカイチ。天道から認められSS#4にてザビーの新たな資格者となる！

加賀美新／仮面ライダーガタック

かつて天道とともに『ワーム』の脅威から人々を守ってきた『戦いの神』ガタック』と呼ばれていた青年。TV本編での戦いの後、警察官として町の平和を見守りつつ、新生された『ZECT』で天道の右腕としてワームの残党と戦っていた。ちなみに絵里推し

風間大介／仮面ライダードレイク

フリーのメイクアップアーティストでありドレイクの資格者。有名なモデルの付き人として海外へ進出するに伴い海未をドレイクの後継者として選定する！得意技である『風間流奥義・アルティメットメイクアップ』を海未に披露する

ゴン（本名：高山百合子）

大介と行動を共にしている少女。大介のアシスタントとして彼と共に海外へ旅立つ

天道樹花

天道の妹。にこ推し、TVシリーズで見られた天真爛漫な笑顔や元気っぷりは本作品でも健在。

矢車想／仮面ライダーキックホッパー

地獄兄弟の兄。かつて『ZECT』のエリートでありザビーの資格者だったが、今では完全に廃れたまま音ノ木坂に現われた。ちなみに

弟分の影山の命が天道によって救われたことを認識している。そのため以前よりは大人しい方。

影山瞬／仮面ライダーパンチホッパー

地獄兄弟の弟。矢車と同じ『ZECT』のエリートでありザビーの資格者だった。TVシリーズ終盤にて死亡されたかに見えたがカブトの持つハイパーゼクター時を遡る力で命を救われた。．．という本作品のみの設定。

#1 最強男との出逢い

・ ・ ・ 大丈夫だ ・ ・ ・ 俺がそばにいる ・ ・ ・
・ ・ ・ 俺が ・ ・ ・ ずっとそばに ・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ チュンチュン ・ ・ ・ チュンチュン ・ ・ ・ (小鳥の囀り)

朝 ・ ・ ・ 寝室の窓から朝日が刺してきて夢から覚めた少女

真 「 ・ ・ ・ うん ・ ・ ・ 何? ・ ・ ・ 夢? ・ ・ ・ 」

真母 「真姫ちゃん! そろそろ起きないと遅刻するわよ!」

真 「あつ、はくい!」

ベッドから起き上がり学生服に着替える少女

♪♪♪ 始まりの朝♪♪

真(私の名前は西木野真姫。国立音ノ木坂学院の1年生。両親はここ音の木坂でも有名な西木野総合病院を経営し将来的に私が継ぐことになっている。その一方でスクールアイドルグループ『μ's』のメンバーであり作曲も担当しているの)

真 「じゃ、行ってきま〜す」

真母 「いつてらっしやい!」

娘を見送る真姫の母親、その一方誰かと電話で話をしている真姫の父親

真父 「では今日から家の事を頼むよ! 娘が学校から帰ってきたら是非君のことを紹介するよ! 楽しみにしていってくれ」

― 音ノ木坂学院前 ―

通学途中、真姫のもとに二人の少女がかけよって来る

凜 「おーい! 真姫ちゃん!」

花 「おはよう! 真姫ちゃん」

真 「おはよう! 花陽、凜!」

このショートカットの活発で猫みたいな子が星空凜、そして一緒にいる可愛いらしい声をした子が小泉花陽。私と同じ『μ's』のメンバーでありクラスでも一番仲のいい私の友達よ。

凜 「あれ? 真姫ちゃん何か顔色悪いけど、風邪でもひいたの?」

真「いやちよつと昨日変な夢見ちゃってね・・・」

花「変な夢？」

真「なんて言えればいいのかしらね？何か変な者に襲われそうになって、そしたらまた変なのが現われて私を助けてくれて・・・それから・・・」

凜「それから？」

真「そこから先が思い出せないのよ。何か言っていたような気がしたんだけど・・・」

花「でも、襲われちゃうとかちよつと怖いよね？私だったらタスケターってなっちゃうよ！」

真「まあ夢の話だしそこまで気にしてないからいいんだけどねえ・・・ただ」

凜・花「ただ？」

真「・・・ううん、何でもないわ！さあ早く行きましょ！」

そう言って三人はそのまま学校へと入っていく

授業中、昨日の夢のことが気になる真姫。ずっと窓の外を眺めている。それに気づき真姫に目を向ける凜と花陽

キーンコーン　カーンコーン

その日の放課後

凜「よくし！今日も練習行つくにゃ〜」

真「相変わらず元気だけはいいわよね凜は」

凜「ちよつと真姫ちゃん、それどういう意味にゃ？」

真「どういうって、あなたまた授業中ずっと寝てたでしょ？ちよつと見てたんだからね」

花「フッフ、凜ちゃんらしいよねえ」

凜「ウウウ、かよちんまで酷いにゃ！いいもん授業なんか聞かなくとも凜は勉強できる子にゃ！」

真「この間テスト前の勉強会で悲鳴あげるときながらよく言うわよ！」

凜「うっ！そ、それは・・・あつ、おっほのかちやくん、ことりちやん、海未ちゃん！」

真・凜（誤魔化した・・・）

ほ「あ、凜ちゃん、花陽ちゃん、真姫ちゃん！」

海「お疲れ様です」

こ「凜ちゃん今日も元気だね！あれ真姫ちゃん？顔色悪いけど何かあった？」

真「えっ？朝も凜に同じ事言われたんだけど、私まだそんな顔してる？」

絵「そうねえ、何だかとっても疲れてるって感じだわ」

真「あっ、絵里」

海「私も絵里に同意見です。今日は無理せずに練習休んだ方がいいのではないのでしょうか？」

真「だ、大丈夫よ！もう海未までそんなこと・・・」

ガツシ 後ろから何者かが真姫の胸を鷲つかみする

真「きゃっ！って希！」

希「いや〜元気がない女の子見るとついついワシワシしたくなってしもうてなあ〜♪♪」

真「もうっ！離しなさいよ！別に私は大丈夫だって言ってるじゃないのよ！」

真（ここで他のメンバーも紹介しとくわね！）

二年生

高坂穂乃課・・・『μ, s』を立ち上げた発起人であり音ノ木坂学院新生徒会会長！みんなをまとめるだけの実力と魅力を兼ね備えた我らがリーダー。

南ことり・・・穂乃果の幼馴染で『μ, s』の衣装担当。秋葉で伝説のメイド『ミナリンスキー』。また学院の理事長の娘でもある。

園田海未・・・弓道部のエースにして生徒会副会長。『μ, s』の作詞兼顔芸担当。必殺技は『ラブアローシユート』

三年生

絢瀬絵里・・・才色兼備のロシア系クォーター。『ハラシヨ』が口癖でみんなの頼れるお姉さん。

東條希・・・関西弁でしゃべるスピリチュアルな『μ, s』の母親的な存在・・・だが、隙あらば『ワシワシ攻撃』とセクハラ親父的

な一面も・・・

そして・・・

ほ「それじゃみんな！今日も練習イックヨー!!」

バンツ！ほのかが屋上の扉を開けるとそこには

に「につこにこにー！あなたあのハートににこにこにー！笑顔届ける矢澤にこにこー！にこにーって覚えてラブにこ！」

真「気持ち悪い・・・」

に「ちよつと！今自分から自己紹介を・・・」

真「知らない！」

凜「また二人して喧嘩してるにやあ」

希「相変わらず仲良しな二人やね・・・笑」

にこまき「仲良くないつつつ！」

μ s「アツハハハハハハハ」

真（この子が私たちアイドル研究部部长矢澤にこ。アイドルとしてのプライドだけはμ sの誰よりも高くていつも周りごとと衝突しちゃうちよつと痛い子。だけどアイドルに対しての想いは他の誰よりも人一倍強い子。そんなにこちゃんと私、何故か最近世間ではカツプリング扱いされてて本当迷惑な話よね・・・私はそんなつもりないんだから／＼）

パン！パン！

海「ハイハイ！二人ともそこまで！早く練習始めますよ！」

パンパンパンパン《手拍子音》

海「1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8！」

真（みんな性格もバラバラで个性的だけど、私たちはこの音ノ木坂学院の廃校を阻止しようとするμ sを結成。そしてみんなが一丸となってアイドル活動を続けた結果、ついに廃校の危機から学校を守り抜くことができたのだった。そして一度は辞退してしまったスクールアイドルの祭典『ラブライブ！』に今度こそ出場を果たすため私たちは走り続けていく！この9人しかできないスクールアイドルグループ『μ s』として・・・）

海「ハイ!では10分休憩に入ります!」

ほ「ふう〜疲れたあく〜ことりちゃんジュース取って〜」

こ「ハイ!ほのかちゃん!」

ほ「ありがとう」

希「ねえねえエリチ、最近『ドツペルゲンガー』ってのがこの音ノ木に現われたって話知ってる?」

絵「何よ、いきなり?おばけの話?」

花「ドツペルゲンガー?」

希「うん。なんでも自分と同じそっくりさんが突然目の前に現われて本物を消しちゃうんだって〜それでそのドツペルゲンガーが本物と入れ替わりに人々の中に溶け込んでるみたいなんよ!」

ほ「ひえ〜それは怖いねえ〜」

に「ふん!そんなの、ただの子供だましじゃない」

真「そう言ってる割に足が震えてるわよ!にこちゃん!」

に「べ、別にビビッてなんかいいわよ!」

凜「凜はお化けとか平気だからそんなに怖くなんかないにや〜」

海「それにドツペルゲンガーって言ってもあくまでも都市伝説ですからねえ」

凜「それよりかよちん!最近この近くにおいしいラーメン屋の屋台が来てるんだって!帰りに探しに行こうよ!」

花「ええ〜でも私ダイエツトを・・・最近またふっ・・・」

凜「大丈夫大丈夫!凜今度と一緒に走ればすぐに痩せるから平気だにや〜」

真「どういう理屈よそれ?」

凜「理屈なんていいのいいの!それより真姫ちゃんも一緒に行こうよ」

真「ええっ、私は別に・・・」

そんな中、真姫たちのいる音ノ木坂学院の上空を奇妙な虫が飛んでいた

ン
ギユイイイイイイン　ギユイイイイイイン　ブウウウウウウウウウ

―後半へ続く―

凜「あっ!!きつとあれだよ!ほらほらかよちん、真姫ちゃんこつちこつち♪♪」

花「あつつつつ、ちよつと凜ちゃん・・・そんなに強く引つ張らないでえ〜」

真「まつたく、好きな事になると本当止まらないんだから、凜も花陽も」

凜「にこちゃんの事になるとすぐムキになつちやう真姫ちゃんと一緒にやあく♪♪」

真「ヴェエエ!?／＼／＼こらあ!凜っ!」

凜「真姫ちゃん顔真っ赤にやく笑」

花「ふふふ・・・真姫ちゃん可愛い」

真「何よ花陽まで／＼／」

凜「やったー凜たちが一番乗りにやー♪♪さあ、みんなで行つくにやー!!すみません!全部のせラーメン3つ!!」

??「あっ!お客さん!いらつしやいませー♪♪」

まきりんぱな「んん!」

凜「お・・・女の・・・子??」

花「こ、この子がこのラーメン屋の・・・?」

真「ま・まさか・・・ねえ?」

樹「あのく、みなさんってあの有名なスクールアイドル『μ's』のメンバーですよね?」

まきりんぱな「えっ!?あ、ま、まあ・・・」

凜「あ、あの凜たちのことを知ってるのか・・・にや?」

樹「もちろんですよ♪だつて私たち皆さんのライブが見たくてこの音ノ木坂にやってきたんですよ」

真「ああ、どうやら私たちのファン・・・のようね／＼／」

花「なんか照れちやうよね／＼・・・わざわざ私たちのライブ見に来てくれるとか・・・」

凜・真「う、うん(照れながら)」

樹「まあそれもあるんですけど、私のお兄ちゃんがしばらく用事が

あるとかこの街に来たつてのもあるんですよ」

真「お兄ちゃん？」

樹「はい！なんでもここの・・あつ！お客さんだ！すみません今席埋まっていますので後ろに並んで・・」

男「フン!!」バサ ドサツ！

花「きやつ!!」

凜・真「かよちん・花陽!!」

樹「ひつたくり!?大丈夫ですか?今警察を!」

真「ちよつと花陽大丈夫？」

花「ああ・私の鞆が・まだお昼残しておいたおにぎり3つ入っているのに・泣」

真「こんなときにおにぎりの心配してる場合じゃないデショー!」

凜「よくもかよちんを・待つにやー!!」

ダツ ダツ ダツ（ひつたくりを追いかける凜）

真「ちよ、凜!!1人じゃ危ないわよ!!」

陸上選手顔負けの猛スピードダツシュでひつたくりに追いつく凜。すると追い詰められたひつたくりがナイフを片手に構え凜を威嚇してくる。

ひ「近づくな!!刺すぞつ!」

凜「ひつ、きやあ!」突然刃物を突きつけられ、それに驚き腰を抜かし立上れない凜

真「凜!」

凜をかばい盾になる真姫。

凜「真姫ちゃん。凜動けないにや。泣」

真「や、やれるもんならやってみなさいよ!」

凜「真姫ちゃん、ダメだよ!凜を置いて逃げるにや・」

ひ「ふふふ、いいだろう。希みどおりにしてやる・・グルルル」
男の目が一瞬光る

真（えつつつ?何今の?この人普通じゃないっつ!）

男が近づいてくる

グルルル

真(泣・・・パパ・・・ママ)

《《CLOCK UP》》

グルルルルル?! ドン!

男が一瞬で吹き飛びあたり一面の支柱や壁にヒビが入ってくる
目の前に一瞬だが赤い閃光が飛び交い動揺する真姫

真(え?・・・今度は何?)

《《CLOCK OVER》》

電子音声がなると同時に『何か』に吹き飛ばされた男が100mほどに移動していた。男は慌てふためきながら一目散に逃げていく。

その様子を見て呆然としている真姫の前に

??「逃げられたか?仕方がないな。下手に動けば、せつかくの豆腐が崩れる」

真(何?このへんなの?ていうか豆腐?)

困惑する真姫。艶やかで真っ赤なボディ。それに対して透き通った空のように青い複眼。甲冑のようにも見えるが、どこか近未来的な意匠を感じさせる。そしてその外見のモチーフはまるで・・・

真「・・・あれは・・・」

—KABUTO—

ブウウウン(変身解除音)

真「ヴェエエエ!」

??「人に見られたか?まあいいか。それより早く樹花のところ
に・・・ん??」

男は独り言を言いながら後ろのほうに振り向き、真姫の顔を見るなり動きを止める。そして真姫をじっくり見ながら

??「ほう・・・なるほど・・・そういうことか」男は一人で納得しながら微笑する

真「な、何よ!いったい今のは何だったの??それとさっきのあなた

の姿!! っていうかあなたの手に抱えてるのは何よ?」

?? 「ん? これは豆腐だ!」

真 「豆腐? なんなのまったく、ホントイミワカンナイー」

?? 「そんなことより、そこで気絶しているその子を何とかしたほうがいいんじゃないのか?」

真 「え? あっ、凜! 凜! しっかりしてよ!」

凜 「・・・ウウン・・・凜・・・お魚・・・嫌い・・・ニャア」

真 (気絶してる。でも無事でよかった・・・ツホ)

?? 「まったく、女がひとりでひつたくりを、まして刃物を持った男を捕まえるだなんて無茶にも程があると言うもんだ」

偉 そうな口調に苛立つ真姫。

真 「つちよ、そんな言い方しなくても、確かに助けてもらって感謝はしてるけど」

?? 「助けるのは当然だ! なんせ地球上のあらゆる生き物を守るのが俺の仕事だ!・・・人間からアメンボまでな!!」

真 「はあ?・・・アメンボ?」

ますます意味がわからないわこの人。

苛立ちが感極まって声を荒げながら真姫が

真 「もうっ!! いったい何なのよあなた?」

♪ BGM ♪

男は右手の人指し指をまっすぐ天に向けながら呟く

「おばあちゃんが言っていた。

・・・天の道を往き・・・総てを司る男」

真 「えっ??」

天 「俺の名は、天道 総司(てんどう そうじ)!!」

太陽の光が天道を一瞬にして照らし出しその眩しさに目を瞑る真姫。その神々しいまでの輝きに圧倒される。そして・・・

真 ナニソレイミワカンナイ人甘|甘人

とそこに花陽と一緒に樹花が走ってこちらに向かってくる

樹 「あくーいたいた!! お兄ちゃん! 大変大変! 今ひつたくりがやってきてー!」

花「ハア・・・ハア・・・タスケテー」息が上がる花陽
天「樹花！大丈夫だ！悪いやつは追い払ったよ！」

樹「本当につ!?さすがはお兄ちゃん♪♪」

真・花「え??」

花「お、お兄さん??」

真「まさかさつき言つてたお兄ちゃんて」

樹「そうだよ！この人が私の自慢のお兄ちゃん♪♪そして私が（レ
ンゲを片手に天に向けながら）

天の道を往き、樹と花を愛しむ少女：天道 樹花（てんどう じゅ

か）中学2年!!シャツキーーン♪♪」

・・・え?・・・

真・花「ヴェエエエエエエ!?／タスケテエエエエエ!?」

凜「ンンン・・・ニヤア?」

その夜

西木野家・・・警察に被害届を提出し、花陽と凜を送り届けた私は
ようやく自宅に辿り着くことができた。まったく凜のおかげで散々
な一日だったわ

真「まったく凜のおかげで散々な一日だったわ（それにしてもさつ
きのあれ、ホント何だったんだらう?）」

玄関のドアを開ける真姫

真「ただいま・・・」

真母「!?真姫ちゃんっ！心配したんだからもう・・・泣」

真父「真姫!!どこも怪我はしてないか?どこか痛むようならすぐ治
療を！」

真「あっ！パパ、ママ！私は大丈夫よ！心配かけてごめんなさい・・・

花陽と凜もど

こも怪我はしてないから」

真母・真父「ツホ・・・良かった」

すると家の奥からもう一人出てきて西木野親子のもとに近づきな

がら

??「どうやらお嬢さんは無事だったようですね。本当に良かったですね?西木野先生」

真「あれ?なんか聞き覚えのある感じの声?しかも男の人」

??「しかし刃物を人に突きつけてくるなんて・・・」

真「え?まさか、ひよつとして・・・」

??「私の祖母が昔よく言っていましたよ。刃物を握る手で人を幸せにできるのは料理人だけだ・・・と」

真「この口調!?!」

??「せっかく人を幸せにできる道具を持ちながら、人を不幸せにしてしまったのは

同じ刃物を扱う我々料理人としては心が痛みます。」

真父「ああこれはすまない、今日は君に娘を紹介するつもりがこんな慌しくなってしまうて」

??「いえいえ、お気になさらず。私のほうは大丈夫ですので」

真「あ、あのパパ。その・・・この方はいったい」

真母「あらあ、真姫ちゃんにはまだ話をしてなかったわよね?こちら今日から家で料理人として働いてもらう」

天「天道 総司(てんどう そうじ)です。今日からよろしくお願
いします。真姫お嬢様」軽く会釈しながら

・・・え?

真「ヴェエエエエエ!?」※本日3回目

西木野家門前・・・さきほどのひつたくりが玄関の方を眺めている

そして・・・グルルルル　グルルルル　(目を光らせながらワームへと変貌)

《シャーーーーー!!》

t o b e c o n t i n u e

次回予告

デデーン

♪ BGM NEXT LEVEL ♪

ナレーション「仮面ライダーカブト!!」

真「今日から家に働くとか・・・イミワカンナイ・・・」

天「お前スクールアイドルやってるんだな!」

凜「凜はあの人が悪い人に見えないニャー♪♪」

海「破廉恥です／＼／」

??「そうか・・・あのカブトが・・・」

ほ「真姫ちゃんファイトだよ!!」

天「言ったはずだ!!地球上のあらゆる生き物を守るのが俺の仕事だ

!

変身!!」

花「ヘンシンシチャッタノオオオオオオオ!?」

真「本当に・・・あいつが・・・」

ナレーション「天の道を往き総てを司る!!」

#2 ヘンシンシチャツタノオー!

―屋上―

樹「みなさーん! 順番が来るまで列を崩さず並んでくださーい!」
天道と樹花がラーメン屋の屋台を学院の屋上に設置している。その屋台の前を長蛇の列が並んでいる。それはなんと屋上から1階の階段まで続いていた。そこに並んでいるのは生徒たちだけでなく教師たちまでが天道のラーメンを食しようとして列に並んでいるのであった。

ヒデコ「このラーメン! 次元が違う美味さだわ!」

フミコ「すみませーん! おかわりっつ!!」

ミカ「あつ、こつちにもー!」

真姫(なんて言うか・・・凄い・・・いや本当に凄いのはそんな大勢の生徒たちをさばっているこの2人の兄妹のほうなんだけど。何あの天道兄の華麗な包丁捌きと隙のない動き。麺一杯作る一連の動きが目にも止まらない速さだわ。とても人間業じゃないわ。そしてそんな天道兄の動きについていけてる樹花ちゃんの反射神経。この二人のコンビネーション・・・もはや神レベルよね)

凜「ううん：麺が澄んでいる・・・クンクン・・・出汁は昆布と鰹か：ズズズ・・・うん! つまいにやああああ♪♪」

花「凜ちゃんてば、もうそれ三回目ダヨー」

絵「うん! ハラシヨー」

希「これはまたスピリチュアルな味やね」タロットカード片手に
に「ぬぬぬく悔しいけど・・・私が作るのより全然美味しいく♪♪」
ほ「ひやくこれはすごい! すみませーんこつちにもおかわりー」
海「ほのかっ! そんなに食べてはまた太りますよ! 飯にもあなたはμsのリーダーなんですから! ことりからも言っただけくださ
い。」

こ「まあまあ海未ちゃん。ほのかちゃんのことだから心配ない
よう・・・と思うけどなあ」

海「またことりはほのかを甘やかして・・・」トホホ

とその時

天「よう！・・・お前スクールアイドルやってるんだな！」

真「ヴェエエエ!？」

背後から天道が突然問いかけてきて、それに驚く真姫

真「え？いやその・・・そうだけど・・・悪い？」

天「いや、ただあの西木野総合病院の跡取りがスクールアイドルというのがちよつと面白くてな」

放課後。μ, s が屋上でのダンスレッスンの準備をしている最中、天道と樹花は屋台撤退作業の途中であった。

樹「ことりさん。今日は学校の屋上を借していただき、どうもありがとうございました。理事長さんにもこの後お礼を言いに伺いますね。」

こ「いえいえこちらこそ。お母さんもすごく喜んでくれてたよ。是非またうちの学校で屋台を開きに来てほしいって言ってたよ。」

真（私とことりの母親同士が知り合いだったので、うちのママが学院の理事長であることりの母親に天道が音ノ木で有名なラーメン屋の屋台を出していることを話をしたところ、学校で店を出してほしいと要望があり今回の事が起こったそう。いやそれにしても面倒ねえ・・・皆には天道がうちに働きに来ていてるなんて知られたくないし・・・でも天道はそんなそぶりはなさそうだし安心かn・・・）

樹「あつ！そーいえば、確か真姫さんのお家でしたよね？うちのお兄ちゃんが専属で料理人してるのって？」

天・真「あ・・・」

樹「？」

μ, s「えっ?」

— エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ —

花「真姫ちゃんそれ本当?？」

凜「ずるいにや・・・真姫ちゃんだけこんな美味しいラーメン毎日食べれるなんて」

に「いや毎日ラーメンは食べないでしょっ!」

希「あらまあ」

ことり「だから真姫ちゃんのお母さんからうちのお母さんに今回の話が来たんだ。なるほどーハイ（・8・）チュンチュン」

海「そそそ・・・そんな真姫・・・破廉恥です／＼若い男女がひとつ屋根の下で暮らすなどと・・・」顔面真っ赤にして頭から煙が上がる海未

絵「落ち着きなさい海未！あなた絶対なんか勘違いしてるわよ」

ほ「真姫ちゃん！ファイトだよ!!」

真「ファイトだよ！じゃないわよっつ!!話を聞きなさいよ」

・・・数分後・・・

μ, s 「料理人!?!」

ほ「つまり昨日ひったくりにあつた花陽ちゃんたちを助けてくれたのが、」

絵「こちらにいる天道さん」

希「しかも昨日からは真姫ちゃん家で専属の料理人」

こ「そこから真姫ちゃんのお母さんから私のお母さんへ天道さんのに紹介されて」

に「今日この学院の屋上でラーメン屋の屋台を開きに来たってことね」

凜「おかげで昨日食べ損ねたラーメンがたらふく食べれたにやー☆」

花「あ・あのう・昨日は凜ちゃんと真姫ちゃんを助けてもらいありがとうございました。」

海「ハハハ・・・破廉恥です・・・ハレンチです・・・」シウウウウウ

ほ「海未ちゃんまだ気を失ってるよう」

真「まったくうゝ本当にわかってくれたかのかしら」

樹「ごめんなさい・・・私その・・・思わず口が滑っちゃって」

天「樹花、はしゃぐのも良いがおしゃべりも大概にするんだぞ」樹花の頭を撫でながら

樹「はい」

花「それにしても二人とも兄妹ですごく仲いいですよ。なんか羨

ましい」

絵「兄妹同士仲いいことはいいことよ！ハラショー！」

樹「はいつつ！私お兄ちゃんのことかだーいスキですから♪」

微笑ましい感じの空気。しかしその中でつい反応的になってしま
う真姫が

真（ああなんだろう…この最初の合宿のときと同じような感じ。嬉
しいはずなんだけどどうも素直に喜べない。ていうか昨日のひった
くりもそうだけどこの人だって普通じゃないんだから。みんな騙さ
れてるんじゃないの。昨日のあの姿何だったんだろう）

真姫は天道に目をやるが、天道は一人だけ学校の外に目をやってい
る。まるで何者かの視線を察知して警戒しているかのように。

真（…？）

樹「お兄ちゃん、どうかしたの？」

天「いや、何でもない。さてと。このまま一気に後始末を済ませよ
う。樹花！今日もいつも通り晩御飯の支度はひよりに頼んであるか
ら手伝いのほうは任せるぞ！」微笑みながら

樹「はーい！」

真「ひよりって？」

樹「樹花のお姉ちゃんだよ！料理の腕前ならお兄ちゃんに匹敵する
レベルなんだから」

天「こらこら樹花！家の身の上話をあまりしゃべるんじゃない！」

樹「あっそうだった。ごめんごめん」

真（…）

μ s 「ラブライブ！」♪♪

（CM前のアレ）後半へ続く

—夕方都内某所—

樹「みなさん今日はどうもありがとうございます。それと今度の
ライブ楽しみにしていますねー！じゃあこれから樹花は塾へ行って
きます」

ほ「いってらっしゃーい！」

樹花は振り返りながら「じゃねえ♪」

絵「樹花ちゃん、とってもいい子だったわねえ」

希「そうやねえ、雪穂ちゃんと亜里沙ちゃんいたら仲良くなれるよ
ろうねえ〜」

ほ「うん♪今度二人にも紹介してあげようよ!」

に「それもいいけど、次のライブも近いんだからあんまり浮かれて
る場合じゃないわよ」

ほ「わかってるよ!にこちゃん!」

こ「えへへ・・・ところで海未ちゃん・・・あの大丈夫?」

凜「あの子の練習でも顔真つ赤かな状態ですつと踊ってたもん
ねえ」

海「ううう・・・面目ありません・・・ただ真姫があの子と
同居でもするんっじゃないかと思ひまして・・・そしたらあらぬ妄想
が勝手に脳内再生されて・・・」

真「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ!あの子とはそんなんじゃない
って言ってるでデショー!!」

花「真姫ちゃん、ひよつとして天道さんが苦手だったりするの?」

真「別にそういう事じゃないけど、ただあの子からモノを言う感じ
が気に入らないだけよ!」

にこ「それまんまあの子の事じゃないのよ!」

真「どういう意味よ!一緒にしないで!」

ほ「まあまあ真姫ちゃん落ち着いて」

こ「そうそう、あんまり怒っているとライブにも影響しちゃうよ。だ
からこの話はおしまい。ハイ(・8・)チュンチュン」

凜「ことりちゃんの言うとおりだよ真姫ちゃん。それに凜はあの子
が悪い人に見えないニャー♪♪」

真(もう・・・凜たちはあいつの正体を知らないからそんな事言える
のよ)

こ「・・・」キョロキョロ

海「ことり。先程から落ち着きがありませんがどうかしました?」

こ「・・・うん。なんかずつと誰かに見られてるような・・・」

ほ「え?そう?にこちゃんじゃあるまいし」

に「どういう意味よっ!!」

花「そういえば前にそんなことあったねえ」

凜「あーあれね『あんたたちはアイドルを汚している!解散しなさい』」

μ×s「アツハハハハハ」

ほ「ちよつと凜ちゃん物真似上手すぎっ!」

に「／／／くうー何よ!悪かったわねえ」

ほ「ははは。アツ着いたよ!ここだっ!!」

一同が目的の場所の目の前に止まる

μ×s「おおっー!」

こ「これが」

希「東京タワー!」

絵「ハラショー!」

μ×sメンバーは次のライブ会場である東京タワー下にあるステージに下見として訪れたのである。

凜「いやああくスカイツリーもすごいけど、なんだかんだでこつちの東京タワーもすごいにや」

海「そうですねえ。ここなら人も大勢はいつてこれそうですしね」

真「それだけに面白そうね」

ほ「いよーし!次のライブに向けてμ×sファイ」ドンッ!!

倒れるほのか。その前には男がほのかたち9人を瞬きひとつせず見つめている

海「ほのかっつ!」

こ「ほのかちゃん!」

ほ「いてて、あつごめんなさい、あの大丈夫・・・」

まきりん「!!」

真「ほのか!!その人から離れて!!」

ほ「え?」

凜「その人が昨日凜たちを襲ってきたひったくりだよ!!」

μ×s「ええええ??」

絵「早く警察を!」

希「わつかてる」携帯をかける希。しかしノイズが走り電波が遮断された。

こ「どうしょ！ことりの電話も使えない」

海「私もです」

花「私のも」

ほ「どういうこと？」

真「・・・やっぱりこの人普通じゃない」

一同は逃げようと男と反対の方向に身体を向けるが、周りは怪しい顔つきをした作業服の男達が待ちかまえていた。そしてμ☒sはあつというまに囲まれてしまっていた。

希「エ、エリチ・・・これ本気でまずいんちゃう？」

絵「いったい、何なのこれ？」

凜「かよちん・・・」

花「ウウウ・・・ダレカタスケター」泣

男達「グルルルル　グルルルル　（目を光らせながら幼体ワームへと変貌）」

μ☒s「キヤアアアツツ」

男達が一斉に見たこともない緑色の化け物の姿へと変貌し、驚愕するほのかたち9人。

にこ「ちよつとこれなに新手のドツキリ!!嘘だと言ってよ!!泣」

真「にこちゃん」

にこ「真姫つつ!!」

抱き合う二人、そのまま崩れる

ワームがあと一步まで迫り真姫とにこに一撃加えようとしている。

真（今度こそもう・・・駄目みたい・・・パパ・・・ママ）

・・・大丈夫だ・・・俺が傍にいる・・・

真（え？何？）

ワ「シヤアアアアアア」ガキン　キン　キン　キン　キン

突然赤い閃光がワームたちの廻りを飛び攻撃している。するとどこからか声が

・・・おばあちゃんが言っていた・・・

μ☒s「？」

真「おばあちゃんて・・・まさか」

天「男がやってはいけないことが2つある・・・」

凜「この声は？」

天「食べ物で粗末にすることと、女の子を泣かせることだ!!」

花「天道さん！」

天道は夕焼けの光をバックにステージ天井から下を見下ろしていた。

その姿は真姫からは神々しく見えている。その姿に魅了されるμ☒sたち9人。

天「今日は久々の満員御礼だな。だがはやく片付けてしまわないと、そこにいるお嬢さまのデイナーに間に合わなくなるな」真姫のほうに目を向けながら

そして天道はすつと右手を左肩のほうへ斜めに構えた。すると赤い閃光が天道へと向かった

こ「あれは？」

海「カブトムシ・・・ですか？」

ほ「おおつ、確かにカブトムシだ」

希「??このカードは」

ふと希はタロットカードを取り出した。そしてそのカードには《c h a n g e》の暗示が・・・

凜「いったい何が始まるんだにや？」

ガシツ 天道は飛んできた《カブトゼクター》力強く手に掴む！

そして天道の腰には変わった形のベルトが巻かれている。そして・・・

天「・・・変身!!」

ギユイーン ガチャ

《《HEN—SHIN》》

カブトゼクターを腰のベルトに装填した天道。一瞬にして銀色に光る重量感溢れる鎧を纏った戦士の姿へと変身した。

真（やつぱり昨日と姿が違いすぎる）

絵「こら!! そんなに身を乗り出すと危険よ!!」

さらにカブトはカブトクナイガンを斧型のアックスモードに切り替えてワーム達を次々に裂いていく。

天「ハッ!!」

ジャキーン! 最後の一撃を決めるカブト!

グギエアアアア

ワーム達の集団は一斉に爆発四散していく。そして最後の一体が残った。あのひったくりが化したワームだ。すると突然ワームの体が赤く発熱しはじめるとともに一気に幼体は脱皮し成虫態であるアラクネアワームに変化した。

μ×s「ええっ! 脱皮した!?!」

天「・・・」

するとアラクネアは突然貯めのポーズをとると一瞬にして姿が消えた。そしてカブトはいきなり宙へ浮いていきダメージを喰らってダウンした。

天「・・・ウツ・・・ク」

に「ちよつ、あれまずいんじゃないの!」

花「天道さん苦戦してるよ」

凜「助けに行くにや!」立上ろうとして

海「ダメです。また危ない目に逢いますよ」凜を押さえながら

ほ「でもこのまま放っておけないよ。」

こ「でもことりたちにはどうしようもできないよ」

希「その通りや! それにもう一枚のカード・・・これはもしかしたらカードを見ながら

絵「希?」

そのとき真姫が飛び出して行った。

に「真姫!!」

真「あんた何やってんのよ! そんなんで家の料理人が務まるの? もうちよつと本気出しなさいよ! それにもしここであんたに何かあったら、私達樹花ちゃんになんて言えばいいのよ?」

絵「真姫！あの子いったい何を！」

するとアラクネアが真姫の方目の前に現われ真姫に向かって腕を振り上げる

に「真姫！」

μ☒s「真姫!!」

真（っは・・・しまった・・・私）

シヤアアアアア ガシツ！

アラクネアの一撃を間一髪で受け止めたカブト。そして強烈な正拳突きで遠くへ吹き飛ばすアラクネア。

天「言つたはずだ!!地球上のあらゆる生き物を守るのが俺の仕事だ！っと。それに自分の身くらい自分で守れなくては戦士失格だからな！この程度なんの問題もない！」

真「ナニヨ!!さつきまでやられそうだったくせに!!」

天「俺は前にもこいつと同じタイプのワームを、この姿のまま倒したことがあったから特に気にはしていない！だがお前達がいてはそんなに時間はかけてられないようだな」

真「ナニヨソレ！まるで私達がいると邪魔みたいな言い草ね」

ぱなりん「真姫ちゃん！はやくこっちに」真姫を引っ張る凜と花陽

真「ヴェエエ!?ちよつと」ほのか達のもとへ引きずり戻される真姫

天「やれやれ。手の焼けるお嬢様だな」と言いながらアラクネアに目をやるカブト

するとベルトのバックルの角を半分起こす。すると装甲全体に電気エネルギーが走り徐々に上半身のアーマーが腕から胴体、頭部へと順番にせりあがる。

そしてそれに反応しアラクネアがカブトに突進してくる。

それを見ているμ☒sたち9人

μ☒s「んんんんん？」

希「はっ、危ないみんな伏せて」

μ☒s「え？」

天「キャストオフ！」角を反対に倒すガチャ

《CAST OFF》

チュドーン バン

アーマーが一気に弾け飛びアラクネアにダメージを与える。

μ☒s「きゅあああああ！」

真「もう今度はなによ！」

うつ伏せになりながら真姫は目をすこしだけ見開いた。

真（？あの姿は昨日見た・・・）

そこにはまぎれもなく昨日みたあの戦士の姿があった。

艶やかで真っ赤なボディ。甲冑のようにも見えるが、どこか近未来的な意匠を感じさせる。そして頭部に目をやると。顎の中央から一本の角がまっすぐ起立していき一目の複眼が二目になり・・・

《《CHANGE BEETLE》》

—カブトライダーフォーム—

μ☒s「脱皮した！」

ほ「天道さんの姿が!!」

海「あの姿は」

こ「もしかして」

μ☒s「カブトムシ！」

凜「なんかさつきよりカツコよくなってるにやー」

花「なんかスツキリしてる・・・ライザつぶ・・・」

希「スピリチュ・・・じゃなくて・・・スタイリッシュやね」

に「やっぱヒーローショーよね？これ？」

絵「ハラシヨオオオ!!」

するとアラクネアは再び突然貯めのポーズをとると一瞬にして姿が消えた。

ほ「またさつきの攻撃??」

海「いけません」

こ「またやられちゃう」

希「いいえ・・・たぶん・・・あの姿の能力は」

真「え？」

天「クロックアップ!!」

右側のサイドバックルを強く押しながら叫ぶ天道

《《CLOCK UP》》

カブトの姿が消える……

μs「消えたああああ!!」

……カブト視点……

天「クロックアップ!!」《《CLOCK UP》》

ナレーション「クロックアップしたライダーフォームは通常をはるかに超えたスピードで活動することができるのだ!!」

アラクネアの最初の一撃を回避し、蹴りを右左へと一撃ずつあたえ右ストレートで敵を吹き飛ばすカブト。ひるむアラクネア。負けじと口から糸を吐く攻撃に切り替えたが、カブトはカブトクナイガンクナイモードで吐かれた糸を切り裂きながら距離を詰めていく。そしてアラクネアをX字斬りにしダメージを与えてダウンをとる。

するとアラクネアは腕から伸ばした糸で外壁をめくりあげそれをカブトに向けて放りなげた。カブトの目の前に外壁の欠片が迫ってくる。そして……

《《CLOCK OVER》》

ドゴオン 煙があがる

μs「?!」

絵「さつきからなんなの？」

海「これは……何がなんだか……」

こ「ああ……ステージが……ホノカチャーン」ほのかにしがみつきな

凜「かよちゃん……」

花「アアア……タスケテ」

するとアラクネアが9人の目の前に

グルルルル グルルルル

に「ちよつと嘘……こいつがいきってるってことは……」

希「そんなこと……うち信じてたんに……」

真「天道……」

……大丈夫だよ……

μs「え？」

ほ「天道さんはきつと無事だよ!!」

海「ほのか・・・」

こ「ほのかちゃん・・・」

グルルルル　グルルルル　ググ??

く　BGM　ライダーキックく♪

煙の中からカブトがアラクネアの方に向かってゆつくりと歩を進める。まるで何事もなかったように堂々としながら。それに苛立ちを覚えるアラクネア。カブトに飛びかかるが、カウンターで突きと裏拳を連続で喰らいそのまま地面に伏した。

アラクネアを背にカブトはベルトのバックルに手をやると

《《ONE TWO THREE》》ガチャン

バックル上のボタンを順番に押すと、倒した角を一度もとの場所にもどす。

そして・・・

天「・・・ライダー・・・キック!」

《《RIDER KICK》》

再び角を反対に倒すと同時にベルトから強力な電撃が頭上のカブトホーンに向けて走り、青い複眼が強烈な光を発した。アラクネアは最後の悪あがきをと腕を振り上げながら走っていく。そしてカブトは右足を構え左足に重点をおいて背後からのカウンターでか上段回し蹴りをアラクネアの頭部に向けて叩き込む

天「ハッツ!!」

グギエアアアア

断末魔の悲鳴を浴びながらアラクネアは爆発青い煙を上げながら消滅した。

その一部始終を見ていたμs。その強烈なインパクトを受けて全員硬直したままだった。

μs「・・・」

ほ「ら・・・ライダーキック?」

希「やつぱり・・・あの人は・・・」

希の手には先程のタロットカードが握りしめられていた。

カードには『the world』即ち、完全・完璧・優秀・正確無比!と正しく総てを司るに相応しい暗示が出ていた

真「・・・天道・・・総司・・・」

天「・・・」

そして無言のままカブトは右手の人指し指を天に向けてゆつくりと伸ばす。

・・・そのころとあるオフィスビルの一室・・・

モニターでカブトの戦いを一部始終見ていた謎の怪しい影が二つ

?? 「そうか・・・あのカブトが・・・」

?? 「やはりワームの残党が残っていたってことか・・・あのとき全部倒していたと思っていたんだが・・・とりあえずあのスクールアイドルの子たちはしばらく天道に任せよう・・・」

?? 「あのカブトが・・・ボソボソ」

?? 「親父? どうした?」

陸「新・・・頼む天道くんに頼んであの子達のサインをもらってきてくれ!!」

息子の加賀美新の肩を掴みながら血眼になって懇願する父親である加賀美陸。

あきれれる加賀美新

新「親父・・・いつからスクールアイドルにはまっ」

陸「頼んだぞ!!!」

新「あ・・・はい・・・」呆れながら部屋を後にする

くED きつと青春が聞こえるく♪♪

陸「頼んだぞ!!わが息子よ」

部屋を出て行く新、その後ろで陸が呟く

陸「いやっ、戦いの神ガタックに選ばれし人・・・加賀美新よ!」

そんな新の後ろを青くクワガタの形をしたメカが飛んできて・・・

t o b e c o n t i n u e

真姫 次回のラブライブ! 『守りたいものは』

#3 守りたいものは

ほ「じゃあみんな!!また明日ねえー!!」

花「うん!ほのかちゃんたちも帰り道に気をつけてね」

練習を終えて下校するほのかたち9人。真姫とにこと絵里は三人で買いものに行くというところで一緒に帰ることに。

絵「それにしてもやっぱり今でも信じられないわ。私達の街にあんな怪物が現われて、しかも真姫の家で料理人している天道さんがそいつらを倒すための戦士だなんて」

に「何度思い返してみてもどこかのヒーローショーにしか見えないわよねえ」

真「でも私たちは確かにこの目で見たわ。人間が怪物の姿になって、天道が変身して戦うところを」

に「そういえば昨日スーツ姿の男たち同士で話してたのを聞いたんだけど、天道さんが変身したあの姿、見た目通り『カブト』って呼ばれてるみたいよ。それと変身に使っていたあの虫みたいなメカが『カブトゼクター』って言って『ライダーシステム』のうちのひとつみたいよ」

絵「『カブトゼクター』、『ライダーシステム』・ダメだわ私ついていけないわ」

真「ついていけなくてもいいじゃない!どうせ私達が変身して戦うわけじゃないんだから」

絵「そ、そうよね」

真「でも『システム』のうちのひとつってことは他にも天道みたいに変身する人間がいるってことじゃない?」

に「そういうことに・・・ってあれ?ひよつとして天道さんじゃない?」

真・絵「え?」

絵「本当だわ!しかもお巡りさんと一緒じゃない?」

真「なーに?とうとう検問にでも引つかかったのかしら?フフ・・・いい気味ね」

絵「失礼でしょ！仮にもあなたの家の料理人なんだから」

真「冗談よ！まったく絵里は真面目すぎるんだから」

絵「悪かったわね！どうせ私は堅物よ！」

に「とにかくそつと近くまで行ってみるわよ！」

そういいながらそつと近づいていく三人組。距離を縮めていき徐々に話声が聞こえてくる

新「それにしても、まさかお前がスクールアイドルの護衛をしているとは驚きだな！しかもそのうちのメンバーである西木野真姫の家で料理人として働いてるなんてさ・・・ああなんか羨ましい」

天「俺とあの子の父親同士が顔見知りだったのが縁で、しばらくあの家で料理人として働くことになっただけだ！お前のように下心で動いているわけじゃない！一緒にするな！」

新「くうくう相変わらず憎まれ口を叩くやつだな！しかも勝手に「全員異常がないと判明次第、即解放するように」て命令出しやがって。本来なら組織で隔離して「ワーム」に関する記憶をすべて抹消しないといけないはずだろ！」

天「おばあちゃんと言っていた。手のこんだ料理ほど不味い。どんなに真実を隠していても、隠しきれぬもんじやない。それに記憶を操作したところであの子たちがまたワームに襲われでもしたらキリがないしな。なにより西木野先生に娘の事で心配をかけさせるわけにもいかなかったしな」

真「え？私ん家のことを考えてたってこと？いやそれより、組織を動かせるほどの力を持つてる天道ていったい？」

絵「一緒にいるお巡りさん。どうやら天道さんとは知り合いのようね。どんな関係なのかしら？」

に「ちよつと押さないでよ二人とも！気づかれるでしょ！」
物陰に隠れながらにこの後ろでぎゆうぎゆうにして天道達の様子を伺う絵里と真姫。

新「でもこのままほつといたら、あの子たちがまたワームに襲われるんじゃないのか？やつらの狙いはどう見てもあの子達のようにだし」
天「違うな!!」

新・真・絵・に「え？」

天「ワームの目的があの子達9人だったら、同じ学校にいる生徒にでも擬態して襲ってくるはずだ。だがあれからあの学校を隈なく調査したところワームの姿は一匹たりとも見当たらない。それどころか俺が今日まで倒してきたワームは全員ただの一般人に擬態していた。おそらく奴らの目的は・・・」

すると突然叫び声が「キャアアアア」

ブウウウン ブウウウウン

に「なな、なによこれ？」

絵「アワワワ・・・ねえこの形つてもしかしてあれじゃない？」

真「ええ！機械のようだけど、どうみてもこれは・・・」

に・真・絵「でつかい蜂ツツツ!!」

目の前を蜂の形をした機械が飛びまわりそれに驚く真姫たち三人

新「あれはザビーゼクター!!」

天「ほう・・・」

新「でもザビーゼクターは確か・・・」

真「ちよつと!!見てないで早く助けなさいよ!!」

するとガタツクゼクターが蜂型のザビーゼクターに突進してきた。攻撃されたザビーゼクターは反撃し二つのゼクターは空中へ上昇していきながら交戦を続け、しばらくしてからザビーゼクターはどこかへと飛び去った・・・

新「あつ、大丈夫ですか？おかしいなあ、普通ゼクターが一般人を襲わないはずなんだけど・・・てあれ？君たちはスクールアイドルの？」

真・絵・に「あ・・・」

絵「あ・・・あはは・・・どうも」

に「えええと、に、につこにつこにー・・・」

新「あつ、にこにつこ？」

真「天道・・・違うの！これはその・・・」

天「ふうくまったくもって世話のやけるお嬢様だ・・・」

呆れてため息をつく天道。そのあと真姫たちはそのまま強制退場された。。。

そしてライブ前日、μ☒sメンバーのもとに理事長からひとつの知らせが

ほ「ええっ？東京タワーでライブを？」

こ母「はい。先日謎の事故の影響で立入禁止になってましたが、壊れたステージも既に修理が完了してまたライブ会場としての使用もできるようになったらしいのよ。それだけでなくどうやらとある偉い人からどうしてもあなた達に東京タワーの会場でライブをやってほしいっていう要望があつたのよ！」

ほ「・・・」

屋上に場所を移し話合うほのかたち・・・しかし

μ☒s「・・・」

こ「東京タワーでライブができるようになったの嬉しいはずなんだけど・・・」

海「それにしてもどうしてまた急に？」

に「理由なんてこの際どうでもいいわよ！それよりもお客さんが求めている以上私達スクールアイドルはその気持ちに全力で応えなければならぬのよ！」

希「にこつち・・・そやけど」

花「やつぱりなんか怖いなあ・・・また同じ場所で怪物たちに襲われてでもしたら・・・」

凜「かよちん・・・」

絵「ほのかはどう思う？」

ほ「うん・・・あの大きな会場でライブをしたって気持ちはあるんだけど、あの怪物たちがまた東京タワーに現われてたくさんの人たちを襲ってしまうんじゃないかなあって・・・それが頭から離れなくて・・・どうしたらいいのかなんて考えちゃう」

真「わたしは反対よ!!今ほのかが言ったようにまた襲われでもしたらお客さんだけでなくμsの今後の活動にだって支障をきたすに決まってる！」

に「真姫・・・」

真姫の一言で全員沈黙する・・・するとそこに

新「そんなときは俺達がワームをすべて倒してやるよ！」

こ「あ、あなたは？」

海「失礼ですが、部外者の方は立ち入り禁・・・」

天「ここの理事長には入校許可を貰っているから問題ない」

凜「天道さん」

花「どうしてここに？」

絵「あなたはこの前のお巡りさん？」

希「エリチ、知り合いなん？」

絵「ええ、まあ」

に「あんたどうしてここに？」

新「はじめまして、sのみなさん！俺の名前は加賀美新。ここに
いる天道のとはその・・・ともだち」

天「俺の部下1号だ！」

新「っっておいつ天道」

天「いいから話を続けろ！」

ぱなりん「つぶう・・・」思わず吹出す二人

こ「ちよつと二人とも笑っちゃダメだよ」

凜「だつてことりちゃん・・・」

海「それであなた方があの怪物から私達をその・・・護っていただけ
ると？」

新「あつ、オホン・・・そ、そういうことだ！こう見えても俺もこの

天道と同じ『ライダー』なんだ！その名も戦いの神『ガタツク』

するとガタツクゼクターが飛んでくる

ブウウウウンキュイイイイインキュイイイン

新「こいつが俺の相棒の『ガタツクゼクター』だ」

ほ「天道さんと同じ『ライダー』??」

絵「戦いの神・・・ガタツク」

希「クワガタムシ・・・なるほど！だからガタツク」

に「うう・・・変なのがまた増えたつて感じ」

真「・・・天道？」

そしてμΣsたち9人は加賀美からこれまでおきた事件の真相を知ることになった。

かつて地球に隕石が落下しその中から地球外生命体『ワーム』が誕生した。ワームは人間に擬態し人知れず社会に侵食していった。擬態された人間は確実に抹消されてしまい彼らは次々と仲間を増やしていった。その脅威に対し人類はワームに対抗する為の組織『ZECT』を設立。そして『マスクドライバーシステム』を開発しこれを迎え打った。天道と加賀美はカブト・ガタツクとしてワームと死闘を繰り広げ、ついにはすべてのワームを駆逐し地球の平和は守られた。はずだった……

海「そんな恐ろしいことが・私達の周りで起きてたなんて」

こ「でも隕石が落ちてきたんで話、私聞いたことないよ」

新「すべてのワームが倒されたその後、ZECTが全人類から隕石落下からの記憶をすべて抹消したんだよ。実質それからZECTも解体され人々の生活に平和が訪れた。それがまさか、ワームに残党がいて君達を巻きこむことになってしまったって本当にすまない!!」

花「そんな加賀美さん謝らないでください」

凜「そうだにや、凜たちのこと守るために戦ってくれてたんだし」

真「……それでもやっぱり私は今度のライブには反対だわ!」

に「真姫? あんた……」

絵「天道さんと加賀美さんが護衛についてくれれば安心してライブができるとは思わない?」

希「エリチの言うとおりやで! それにカードもそういて……」

真「わかってる……言われなくてもそんなことわかってるわよ! ……だけど」

ほ「真姫ちゃん……ギユ」うしろから真姫を抱きしめるほのか

真「ヴェエツツ? ほのか?? あなたいったい」

ほ「わかってる! 真姫ちゃんはみんなのことが大好きなんだもんね!」

真「ちよつつ? 何をいきなり? ナニヨみんなして」真姫の周りをみんなが囲んでいる。次意に海未が語りかける

海「いつかのほのか同様、周りのみんなに危険が及んでしまうのがどうしても怖かったんですよね？」

に「まったくほんと素直じゃないんだから。でもそんな真姫ちゃんにこは大好きだよ！」真姫の手をとるにこ

真「にこちゃん／＼／」

こ「ことりも真姫ちゃんが大好きだよ」

凜「まーきちちゃん！まきちゃん！まきちゃん！まきちゃん！」

真「やめなさいよ凜！」

花「ふふふ、みんな気持ちちは一緒だよ！確かに不安はあるんだけどやっぱりみんなで楽しくライブをやって何かひとつでも残せたらいいなって私は思うよ！」

真「花陽・・・」

ほ「真姫ちゃん。私ね、もしここでライブをすることから逃げたしまったら私達これからもずっと逃げちゃいそうで・・・そのまま私達のこの瞬間も終わってしまいそうで、 $\mu\boxtimes s$ が終わってしまいそうでね、私はそんなのは絶対嫌！ここで逃げずに進んで今度のライブを成功させたいの！そしていつの日か・・・今度こそこの9人でラブライブ出場して、私達の夢を叶えたいの!!」

真「ほのか・・・みんな・・・涙ぐむ真姫

天「大丈夫だ！俺が・・・そばにいる！」

真「え？」天道の言葉を聞き、どこか懐かしさを感じる真姫

真（なんだろう・・・以前にも同じことを誰かに言われた気が・・・）

天「そばにいて、必ずワームからお前達を守ってやる。そしてお前達のライブも成功させてやる！だから安心して行って来い！・・・俺を、俺達を信じてはくれないか？」

真「天道・・・」グス

凜「あー真姫ちゃん泣いてる！可愛いにゃ〜」

真「なっ、泣いてないわよ！失礼ね！」

$\mu\boxtimes s$ 「はははははははははは」

絵「ハラショー」

希「ふふふ、星がまた動き出したようやねえ」

μ☒sたちの様子を見て笑みを浮かべる加賀美

新「青春つていいよな・・なあ天道」天道の肩に寄り添おうとする加賀美。すかさずそれをかわす天道・・・ガクツ

そして・・ついにライブの日がやってくる・・・

東京タワー周辺には大勢の人たちがμ sのライブを見に来てい
る。その中には真姫の両親、ほのかたちμ sメンバーの家族や学校
の友人そして樹花の姿もあった。

真母「まきちやー！ーん！」

こころ「おねえさま頑張つてえええええ!!」

こたろう「みゅーずう・・」

ほ母「ほのかああああ!!」

雪穂「おねえちやああん!!」

亜里沙「ミューズ！おねええええちやん！」

ヒフミトリオ「海未ちやーん、ことりちやーん」

一年・三年生「のぞみー！凜！はなよー！絵里ー！」

ステージ裏・・

海「学校の時とはやはり迫力が違いますねえ」

こ「なんだか緊張してきたね」

花「うう・・この衣装かわいいかな？」

凜「かよちゃんはどんな衣装着てもとっても可愛いよー」

絵「そうよ！それにしても今回の衣装！カッコよくてなんかクール
ねえ！」

こ「えへへ・・実は天道さんが変身したカブトをイメージして作っ
たんだよ！あつ・・天道さん見にきてくれるかな？」

真「・・」

ほ「天道さんが気になるの？」

真「え？そうじゃないけど・・」

希「大丈夫や！あの人はどこにいても真姫ちゃんのそばにおる！天
道さん自身が言つてたことやん？だから安心してライブに臨もう！」

海「希の言うとおりですよ！ここまでせつかくここまで来たんですから」

真「・・・うん！そうね！いいわ！思いつきりやってやろうじゃない!!」

に「さあ皆、用意はいいわね！今日来てくれたみんなを一番の笑顔にするわよ!!」

本番前に円陣を組むほのかたち！右手をピースしながらそれぞれ中心に集めて

ほ「1」、「2」、海「3」、真「4」、凜「5」、花「6」、に「7」、希「8」、絵「9」

ほ「よーし！行こう！」

— μ ⊠ s ミュージック！スタート—

会場に μ ⊠ s が登壇し観客が一斉に盛り上がる!!

オオオオオオオオオオオオオ!!

♪ Music S. T. A. R. T!! ♪

真姫がセンターを務める楽曲からライブがスタートする！9色のサイリウムの光でいっぱいになり会場にいる人たちの心が今まさにひとつになっている!!

しかし・・・

会場が賑わう中、ワームの集団が会場周辺に集結して今にも襲撃に入ろうとしていた。その中には最初に天道が取り逃がしたひとつたぐりに擬態したワームの姿が・・・

ひ「グルルルル・・・シャアアアアアアアア」

するとどこからか声が

天「よう！どこを見ている！こっちだ！・・・久しぶりだな・・・ひとつたぐり犯」

ひ「グルルルル・・・カブト・・・」

天「この間はよくも俺の妹に手を出そうとしてくれたな！お前たちの目的はスクールアイドル『μ's』の活動の妨害・・・ではなく。現『ZECT』のトップであり、『カブト』であるこの俺、天道総司の抹殺のはずだろ？」

天道に続いて加賀美も現われる

新「なるほど・最初の襲撃あの子たちを人質として誘拐し、天道を罠にでもはめて抹殺でもしよと企んでいたってわけか！相変わらず考えてることが卑劣だな！お前らワームってのは」

天「生憎だが俺がそんなことで倒せると思うなよ！現に二度も俺に阻止されてるんだからな！」

ひ「カブト・ガタツク・お前さえ倒せば我々ワームが今度こそこの星の頂点に立てる！」ひったくりの男は正体であるアラクネアワームニグリティアに変貌し戦闘状態に入った！

天「やはり複数のワームで一人の男に擬態してたわけか・しかもその男、どうやらスクールアイドルの追っかけ所謂『ラブライバー』のようだな」

新「だから人質に μ sであるあの子達を選んだのか!?この前ここのでの子たちを襲ったのもやつが「ラブライバー」だったから・なんてやつだ・お前たちワームは俺たちが倒す・倒してみせる！来いっガタツクゼクター！」

キュイイイインキュイイイン　ブウウウウウン　ガシツ!!

天道と加賀美に向かって二つのゼクターが飛んできて二人の手に納まる

天「加賀美！行くぞ!!」

天・新「変身!!」

ギューーーン　ガチャ

《《HEN—SHIN》》

くBGM　変身!!く♪

ゼクターを腰に巻かれたベルトに装着する天道と加賀美

重量感溢れる鎧を纏ったカブト・ガタツクマスコッドフォーム

ついにワームとの決戦がはじまった！カウンター攻撃でワームを迎え撃つかブト！それに対し両肩のバルカン砲からの遠距離攻撃をしていくガタツク！

天「フンツ!!ハツ!!」クナイガンアックスモードでワームを切り裂

いていくカブト

新「うおりやあああああー」パンチを乱れ打ちながら突進していくガタツク

その戦闘の最中ワーム達の前に廃れた格好の男達二人がやってくる

?? 「スクールアイドル・ねえ?・・・あいつらはいいいよなあ・周りに賞賛されて・楽しそうじゃねえか?・・・ああん」

?? 「おれも・みんなから応援されたり、歌って踊りたいなあ・はつぴいゝはつぴいゝばーすでい♪♪どきどきわくわくゝ」

新「この歌声?まさか・・・」

天「矢車・・・影山・・・」

二人の視線の先にはかつて『ZECT』に所属していた矢車想、影山の姿があった。

矢「天道・・・お前は・・・いいよなあ・・・どうせ俺なんか」

影「汚してやる・・・太陽なんてえ・・・」

キュイイイン キュイイイン ピョンピョンピョン

やさぐれている二人のもとにバッタ型のゼクター『ホッパーゼクター』2体が飛び跳ねながら向かってくる。二人は『ホッパーゼクター』を手に取り

矢・影「変身!!」

矢車はゼクターを左側に、影山は反対の右側に向けてベルトに装填する。

《《HEN—SHIN》》

《《CHANGE KICK HOPPER》》

《《CHANGE PUNCH HOPPER》》

♪BGM スタンドプレイ♪

キックホッパー、そしてパンチホッパー!変身した矢車たち『地獄兄弟』がワームの大群に向かっていきキックとパンチを繰り返してワームを次々と撃破していく

矢「フンツ!ハツツツ!シュツツ!」

影「フウン!ハツ!」

その光景を見ながら加賀美が

新「天道・・・」

天「仕方ない、今はあの二人にも働いてもらうか！それに・・・矢車には俺から『借し』があるからな」

新「借し？」すると会場から歓声の音が

ワアアアアアアアア キャアアアアアアア（歓声の声）

新「おおうつ？なんだ会場からか！」

天「どうやらμ sのライブが上手くいっているようだ！」

新「そうかあ、あの子達・・・よし！天道！一気に畳み掛けるぞ！やれるか？」

天「フツ・・・当然だ！」

そのころライブ会場では・・・

ほ「みなさんこんにちは！私達は音ノ木坂学院のスクールアイドル『μ s』です！今日は私達の東京タワーライブに来ていただきありがとうございます！今日はみなさんに新しい曲を聴を披露したいと思います！この日のための私達のための、ここにいる皆さんのための、そして・・・人知れず世界の平和の為に戦ってる・・・『仮面ライダー』の為に！」

μ s 「それでは聞いてください！」

♪♪♪

♪♪♪

観客 ワアアアアアアアア キャアアアアアアアアアアアアア

♪♪♪ FULL FORCE ♪♪♪

ワームの集団 「シャアアアアアア」

天道と加賀美はそれぞれの角を半分起こす。すると装甲全体に電気エネルギーが走り徐々に上半身のアーマーが腕から胴体、頭部へと順番にせりあがる

天・新「キャストオフ!!」それぞれのゼクターの角を反対に押し倒し

《CAST OFF》

アーマーが一気に弾け周辺のワーム達を吹き飛ばし
カブト

顎の中央から一本の角がまっすぐ起立していき……

《CHANGE BEETLE》

ガタツク

頭部両脇の角が横から縦に起立していき……

《CHANGE STAGBEETLE》

―カブト・ガタツク ライダーフォーム―

二人のライダーの複眼が発行する

♪♪♪ ♪♪♪

μΣsの新曲をBGMに戦闘が加速していき、4人のライダーは幼
体ワームの集団を一気に撃破していく

♪♪♪ ♪♪♪

観客 ウオオオオオオオオオオ!!!

そのころライダー達の戦闘もクライマックスを迎えようとしてい
た

影「兄貴!!」

矢「!!」

影山の合図でキックホッパー・パンチホッパーはバックルの尻部を
持ち上げ

《RIDER JUMP》

すると二人は勢いよく頭上へジャンプし持ち上げた尻部を再びも
との位置にセットし

矢「ライダーキック!!」

影「ライダーパンチ!!」

《RIDER KICK》

《RIDER PUNCH》

矢・影「ハアアアアア!!」

ワーム ギユアアアアアア

地獄兄弟の必殺技が炸裂しワームの集団は一掃された

そしてカブトとガタツクは戦闘の場所をオフィスビルの屋上へと移した。そこはライブステージから見て正面の場所に位置していた

《《ONE TWO THREE》》 ガチャン

ガタツクはバツクル上のボタンを順番に押すと、倒した角を一度もとの場所にもどす。

新「ライダーキック!!」

《《RIDER KICK》》

新「うおおおりやああ!!」

ガタツクも幼体ワームの集団を必殺のライダーキックで一匹残らず撃破した

ワーム ギユアアアアア

そして残るはアラクネアワームニグリティアだけとなった。ニグリティアはカブトに追いつめられて反撃をするが

天「フンツ!!・・ハツ!!」

華麗な蹴り技とクナイガンから繰り出される攻撃で返り打ちに遭い今にでも逃げ出そうとする。それを見た天道は

天「甘いな・・」

♪BGM 勇気のアイテム♪

カブトは左手を天に掲げその頭上から時空の裂け目が発生しその中から『ハイパーゼクター』が出現しそれをすかさず掴み取るカブト。そのままベルトの左のサイドバツクルに取り付けると中央にあるゼクターの角をまつすぐ倒した。

天「ハイパーキャストオフ!!」

《《HYPERCAST OFF》》

《《CHANGE HYPERBEETLE》》

カブトの姿がさらにメカニックで角はさらに肥大化した『ハイパーフォーム』へとパワーアップをした。それを見たニグリティアはクロックアップしその場から消えた。

天「おばあちゃんが言っていた!二兎追うものは二兎とも取れつてな!ここでお前を倒し、真姫たちのライブも成功させてやる!ハイ

パークロックアップ!!」

《《HYPERCLOCK UP》》

ハイパーゼクターの中央のボタンを叩くと、ハイパーカブトのアーマーが腕、足、胸、背中 of 順に展開し羽が生えたカブトムシのようなシルエットになり、カブト周囲の時間がまるで止まったかのような空間が発生する。するとクロックアップで加速したニグリティアの姿が現われ動きが捉えられた!

《《MAXIMUM RIDER POWER》》

《《ONE TWO THREE》》 ガチャン

ハイパーゼクターの角をもう一度倒し、続いて中央のカブトゼクターのスロットスイッチを順番に押すカブト

天「ハイパーキック!!」

《《RIDER KICK》》

再び角を反対に倒すと同時にベルトから強力な電撃が頭上のカブトホーンに向けて走り、青い複眼が強烈な光を発した。そしてニグリティアの頭上へと上昇し必殺の『ハイパーキック』を決める!!

天「ハアアア!!」

ギヤアアアアア ドガアアアアアアア

激しい爆発がビルの頭上に発生するが、ライブ会場にいる人たちはそれに気づかない。もちろんμ、sのメンバーも

《《HYPERCLOCK OVER》》

ビルのテリポートへと着地するカブト

その様子を見ていたガタツク

新「天道・・やったな!」戦いが終結したことを確認し変身を解除する加賀美。戦いが終わるのと同時にμ、sの曲も終わり再び歓声の音が

観客 ウオオオオオオオオオオ!!!

天道に駆け寄る加賀美、天道も変身を解除しライブ会場のほうへ視線をむけた。すると

観客 「アンコール!アンコール!アンコール!」

会場からμ、sへのアンコールの声が一斉に響き渡る。そしてし

ばらくしてステージに μ 、sが姿を現し

♪♪〜デーン デデン デッデデーン デデデーン〜♪♪

〜OP 僕らは今の中で〜

観客 ウオオオオオオオオオ!!!

ハイッ!

ハイッ!

ハイッ!

ハイッ!

ハイッ!

♪♪〜デデン デッデデーン〜♪♪

天道がほのかたちのライブを腕組みながらビルの屋上から眺めている。その隣で曲に合わせてはしゃぐ加賀美が

影「兄貴?」

矢「スクールアイドルも最高の『地獄だな』・・フツ」

戦いを終えた矢車・影山の二人も μ 、sのライブを会場の端から覗き見ながら楽しんでいる

センターのほのかが一回転しそのまま右手を天にゆっくりと伸ばす。まるで天道の天を指すポーズを意識でもしてるかのように

天「フン・・まったくもって面白いやつらだ・・・」

天道もほのかに合わせてゆっくりと天に向かって右手を伸ばす!

ビルの屋上にいる天道に気づく μ 、sの9人

絵「あれは?」

海「天道さん!!」

こ「加賀美さんも」

凜「凜たちのライブ」

花「見に来てくれてたんだねえ」

希「あのふたりまるで『太陽』と『月』みたいや!なんかスピリチュアルやね」

に「どうやら戦いも無事に終わったようね」

真「フフフ・・私たちのライブどうだったか、あとで聞いておかないとね・・・(天道・・ありがとう・・本当に・・私達を守ってく

れて：）」笑顔になり真姫が他のメンバーに聞こえないように呟いた
ほ「みなさん!!今日は本当に」

μ's「ありがとうございます!!」手を繋ぎ一斉に観客と天道たち
ちにみけて挨拶をするほのかたち!

ピユウウウウン ドオオオオオウン ピユウウウウウン ドオ
オオオオウン

ライブが成功に終わり会場の夜空には花火が打ち上げられた。そ
の間をカブトゼクターとガタツクゼクターがはしやぎながら飛び
交っていた……

t o b e c o n t i n u e

次回予告

デーン

♪ B G M N E X T L E V E L ♪

ナレーション「仮面ライダーカブト!!」

天「お前あいつのことが気になってるのか?」

ほ「にこちゃん和真姫ちゃんまた喧嘩でもしちやってるの?」

に「あんたに料理対決を申し込むわ!!」

??「なるほど……ここにいたんだな……俺と同じ」

真「つてもう!!イミワカンナイ」

こ母「ただ今より、闇キツチンルールにより、料理対決をはじめま
す!!」

ナレーション「天道の道を往き総てを司る!!」

#4 闇キツチン♫ S編

真「天道・あなたまたうちの学校に来て、いったい今度は何の用事？」

天「お前、今日お昼のお弁当を忘れただろ？それでお前のお母さんから代わりに届けてくれと頼まれてやってきたのだ！ほら」

真「あっ、それは・あ、ありがとう」

天「まったく育ち盛りの娘が何をやってるんだか。おばあちゃんが言っていた。病は飯から、食べるという字は人が良くなると思われてきたのだから作曲がうまくいかずにイライラしてしまうんだ」

真「わっ、わかってるわよ！まったく、余計なお世話よ！」

天「それよりちよつと譜面のほう見せてみる。すこしだけ手伝ってやる」

真「ええ？あなた作曲なんてできるの？」

天「愚問だな！俺を誰だと思ってる？・『俺様』だぞ！」

真「ウウウ、相変わらずの俺様っぷりね。どつからそんな自信が出てくるのやら」

そう言いつつも天道に曲を見てもらおう真姫。天道は椅子を持ってきては真姫の隣に座り鍵盤に手をやり曲を弾き始めた

♪♪♪♪♪♪♪♪

♪♪♪♪♪♪♪♪

真（す、すごい・このメロディ・聞いててなんだか心が暖かくなつていく感じがする）

天道に目をやる真姫、その凛としてやさしい眼差しに釘付けになる

真（あっ／＼／）

そんな中

に「なっ、あああああああ〜」

扉のガラスに顔をびったりくっつけながら真姫と天道の様子を見つめるにこの姿が。もはやその様子は妻の浮気を目撃して嘆き悲しむ哀れな夫のような顔だった。とそのとき

希「にこつち？いったいどないしたん？」

に「希！」

希「うくん？おや天道さんまた学校に来てたんやんなあ。ふむむむ。どうやら真姫ちゃんの作曲の手伝いしてるみたいやんなあ」

に「まったくなんなのよあいつ！何度も何度もうちの学校に上がり込んでやってさ！」

希「まあまあにこつち！この前だって天道さんたちのおかげでライブ成功したんやし、大目に見たってやりいなあ」

に「あんたねえ、それでも元生徒会副会長なの？」

希「ウフフフ、おや今度は二人して曲を弾いてるで」

天道と真姫が二人弾きながらで曲を作っていく

♪♪♪♪♪♪♪♪

♪♪♪♪♪♪♪♪

希「あの二人、なかなかお似合いやんなあ〜なあにこつち？」

に「ぐぬぬぬう〜」

希「ははくん、にこつち、さては天道さんに真姫ちゃん取られるのが心配なん？」

に「ば・馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ！なんで、そ・そんな女の子同士とかありえないでしょ／＼」

希「いやいや最近は百合主義の女の子増えてきてるし・・・ええんやない・・・それにうちエリチかて・・・エヘヘ／＼」

に「希・・・あんたそれ本気で言ってるの？」

希「冗談に決まってるやないの！フフフ。な〜に？にこつち本気にしちゃった？」

に「なっ、何よそれ！（く〜別にそんなじゃないってのに。にしても何よ真姫のやつ！あんなにデレデレしちゃってさあ〜）」

とちようど真姫」が誤って天道と手が重なり

真「あつ／＼／」

天「ん？」

真「ご・ごめんさい（かあ〜／＼／」

それを目撃したにこ。とうとう抑えきれなくなり

ガラガラガラ バンツ!!扉を勢いよく空け部屋に上がりこんでく

るにこ！

真「ヴェエエエ!?にこちゃん!どうして?」

に「天道総司!!」

天「ん?」

に「え、えと、その、あんたに料理対決を申し込むわ!!」

真・希「え?ええええええ!」

天「ほう。面白い!受けてたとう」

希「に、にこつち、本気で言うてるのそれ?」

真「突然何言い出すのよ?相手は家で料理人をしているほどのプロよ!勝負したって目なんてないわ」

に「う、うるさいわねえくやるって言ったらやるのよ!」

ほ「おおお!にこちゃんが天道さんに料理対決を挑むとなあ?」

絵「これは只事ではないわねえくハラシヨ・・・」

海「それにしてもどうしてこんな事に?」

こ「料理対決って事は・・・それよの衣装作ったほうがいいのかな?」

花「えええ?衣装まで作って料理対決ってどういうこと?ウウウ:

タスケテ」

凜「かよちんまた泣いてる。でもこれで天道さんがまた料理食べれるから楽しみにやく♪♪」

どこからともなくほのかたちが現われ、天道と真姫の周りを囲っていた

真「つていうか、皆いつの間に行ったのよ?つていうか皆して勝手に盛り上がらないでよ!もう!!イミワカンナイ」

天「フウ・・・人気者は辛いな・・・」

その日の放課後・・・屋上にて

希「にこつち・・・今回ばかりはちよつと無理しすぎたんとかちゃうん?」

絵「あの天道さんに料理対決だなんて」

凜「流石に戦う前に負けているってやつにやく」

に「何よくそんなのやってみないとわからないじゃないの」

ほ「おお！にこちゃん、なんだかすぐくやる気だねえ〜！フアイトだよ！」

海「まったく…この前のライブを終えてからみんな少し気持ちがたるんでるじゃないんですか？これからは今後ラブライブに向けて練習とかしなくてはいけないはずなのに！」

花「うん、それもそうだよね…でもことりちゃん、今度の料理対決よりの衣装作り始めちゃってるし…」

こ「ふくん、ふくん♪♪ チュン チュン (・8・)」

ミシンを動かし衣装を作ることり。ノリノリである

真「なんで料理対決の為に衣装なんて作ってるのよ？」

こ母「ちなみに今度の料理対決の審判は私が務めさせてもらいます。」

μ, s「ええええええええ」

絵「り・理事長？」

海「どうしてここに？」

こ母「ことりから話を聞いてね。私も天道さんの料理がどうしても食べてみたくてねえ〜」

絵「そんな理事長まで関与してくるとかあ…どうなっちゃうのかしら？」

希「あくあ、にこつちの他愛もない嫉妬心がえらいことになっただね？」

に「希っ！」

凜「はっはくん。なるほどそういうことかにや〜」

真「え？どういうことよ？」

海「はあく真姫！鈍いのですね！」

真「なっ、何よ海未まで!!」

に「そうよ！べ、別に真姫なんかの為とかじゃないし！」

真「ちよつと！私なんかたって、それどういう意味よ！」

に「言ったとおりの意味よ！」

真「ナニヨ！勝手に天道に喧嘩なんて売って！馬鹿なんじゃないの！」

に「ああん？私がいっ誰に何しようが、真姫には関係ないじゃない！」

に「ごまき」ぐぬぬぬぬ！」

花「ああ、どうしよう・・・」

ほ「おやおや？にこちゃん和真姫ちゃんまた喧嘩でもしちやってるの？」

絵「まったく・・・いつもこの二人はすぐ喧嘩するんだから」

ほ「まあまあ絵里ちゃん。喧嘩するほど仲がいいって言うじゃない？」

絵「それはそうだけど・・・」

に「もういいもん！にこひとりで勝手にやるんだから！」

そう言つてその場から走り去るにこ

凜「あつ、にこちゃん！真姫ちゃんいいの？」

真「いいのよ！あんなのほつときなさいよ！」

希「おやおやどうなってしまうんやろうなあくすすクス」

屋上から階段を下り、そのまま廊下を走るにこ。すると

ドンツ バタ

に「いったらちよつとどこ見て歩いてるのよ？って」

天「よう！」

に「天道・・・何ひよつとして話聞いてたの？」

天「いや、別に。そんなことよりにこ」

に「何よ？」

天「お前あいつ（真姫）のことが気になってるのか？」

に「なつ、ななななな／＼／あんたまで何言つてんのよ！馬鹿じゃないの！もうどいつもこいつも・・・ぐぬぬぬ・・・と、とりあえず今度の料理対決！覚悟しておきなさいよ！」

捨て台詞を吐きながらまた走りだすにこ。それを黙つて見送る天道・・・

天「・・・」

そのころアイドル研究部部室にて

こ「できたー♪♪ チュンチュン（・8・）」

μ's「ラブライブ！」♪♪

(CM前のアレ) 後半へ続く

そして料理対決当日

バアアアアアアアン　　♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

音ノ木坂学院の地下に設けられたステージ

こ母「ただ今より、闇キッチンルールにより、矢澤にこ対天道総司の料理対決をはじめます!!」

にこと天道、両者が向かい合いながら前に出てくる

に「につこにつこにー♪♪♪つてなんなのよここ?」

絵「学校の地下にこんな場所があったんあって・・・」

アリーナ席から会場を眺める絵里

凜「なんかすごいことになってきてるにゃ〜」

天「まさかこの理事長が闇キッチンを・・・前から只者ではないと薄薄感ずいててはいたが・・・いやそれより）ことり!!なんで俺がこんな衣装着なければいけないんだ?」

天道はことりが作った衣装で登場した。それは赤基調の装飾がたくさんついたライブ衣装のようなものだった。

こ「エへへへ　せつかくだから天道さんにもことりの衣装を着てもらおうと思って」

天「だからって、どう見ても料理に向いてないだろ?」

こ「そんな事言わないで、今日はそれを着て料理してください!天道さん、おねが〜い（ことりアイビームを放ちながら）」

天「ウウウ（あの眩しい眼差しはなんだ?加賀美みたいなやつだな?）まあいいだろ」

真「あら?意外と似合ってるんだからいいじゃない・・・フフフにしても面白い格好よね!写真でも撮って樹花ちゃんに見せてあげたいわ」

天「それは止める!」

こ母「オホン・・・それでは今回の題を発表します!本日のテーマは『味噌汁』!負けたものには料理人としての地位と名誉を剥奪します!」

に「ええええ！料理人の地位と名誉って・・・」

絵「理事長！いくらなんでも大袈裟では？相手はプロですよ」

こ母「絢瀬さん！たかが料理、されど料理です！それに『対決』というからには常に真剣勝負で挑まなければなりません。負けたものはそれ相応の対価というものを払ってもらわなければ何の意味もありません！」

絵「しかし・・・」

に「だ、大丈夫よ絵里！このスーパーアイドル『にこにーにこちゃん』に『敗北』なんて文字はないんだからね　チラ（何よ真姫のやつ、私無関係みたいなオーラ出しちゃって！誰のせいでこんなことになったと思ってるのよ！）」

そんなにこの様子を伺う天道

天（やはり・・・そういうことか）

こ母「それでは『闇キッチン』スウー・・・すたあああああと
！」

ことり母が叫びスタートを切った

に・天「!!」

にこと天道、両者共に包丁を片手に目の前の食材に手を伸ばす

♪♪♪BGM　ラブノベルス♪♪

カタタタタタタ

カタタタタタタ

ほ「おお!!天道さんに負けじとにこちゃんいつになく本気モードだ
!!」

こ「合宿の時から知ってはいたけど、にこちゃん、料理に関しちや
プロに匹敵するほどの腕前だよねえ」

に（ぐぬぬぬぬ・・・やっぱり真姫ん家で料理人をしてるだけあるわ
ね・・・）

天（この『伝説の白包丁』。使ってみてわかるが、やはりそんじよそ
こらのモノとは切れ味が違うな！・・・にしてもこのやつ・・・）真姫
の方に目を向ける天道

真「ナニヨ、にこちゃん。あんなにムキになって」

絵「真姫・・・」

希「？」

絵「希？どうしたの？」

希「いや・勝負の行方が気になってカードで占ったんやけど」

絵「これは、どういうこと？」

希が引いたカードには『恋人 ラバーズ』の暗示が出ていて・
そしてついに

こ母「そこまで!!」

両者共に合図とともに作業を止め盛り付けに入る。そして

こ母「それではまず矢澤にこさんの料理から」

に「は、はいっ！」

味噌汁のお椀をことり母の前にそつとおくにこ

こ母「では・ススス・」

μ s 「うくん？」

♪♪ パアアアアアアン ♪♪

こ母「おおおおおおく！この味は・・・ここはどこ？私は誰？・・・そ
う天国だあああああああああ

※イメージです。ことり母にははりぼての天使のわっかと羽がつ
けて、そのまま幸せそうに宙に浮かんでいる。

μ s 「おおっ！」

ほ「どれどれ？私たちも・ススス」

μ s 「ふああああああああ！」

海「すごいです！」

こ「この味噌汁・・・」

希「具は淡白な鯛の切り身」

絵「それに合わせて味噌にフォアグラを練りこんでいる」

凜「これはまさに芸術品にや〜」

花「にこちゃんの料理がここまでとは・・・」

に「ふん！当然でしょう！本気をだせばにこだって！どう天道総司
！」

天「・・・では俺の味噌汁をどうぞ!」

こ母「では・・・スス・・・」

ほ「あ、では私たちも・・・」

次に天道の味噌汁を口にする一同。すると手を止めることり母そしてほのかたち

に「フン、コメントのしようがない不味さなのかしら?」

勝ち誇ったようににこが眩く。しかし・・・

こ母「違うわ・・・表現のしようがない美味しさだわ」

希「な、なんやこの味噌汁・・・口ん中でそよ風がなびいてくるううう!めっちゃスピリチュアルやあああ!」

こ「これはにこちゃんのとは比べものにならない:チュン(・8・)」

海「さ、流石にこの私も感情が抑えきれません!!ああ・・・みんなのハート撃ち抜くぞおおお!バアアアアアン!」

絵「ハラシヨオオオオオオ!」

に「えっ!?!」

天「・・・」

に「これは一体どういうこと?うくんどれどれ・・・スススス(天道の味噌汁を口にするにこ)んなつっ!これは!この味噌汁に使われている大根はなんだ?」

天「料理を作る途中で俺は一度外に出て、細切りにした大根をそよ風に晒した。そよ風にコーティングされて大根が独特の歯ごたえを生んだのだ!」

に「そよ風を調味料にするとはあ、森を抜け、川を渡ったそよ風が味噌汁の中を吹き抜けていく」

こ母「もはやこれは勝負になりませんね矢澤さん。この天道さんの作った味噌汁の味は天国の・・・上に・・・位置しています。私たちが言えることはただ一つ、この味に比べたら ギロツ」

にこを睨みつけることり母、そしてほのか達も

こ母「あなたのは・・・」

ほ「にこちゃんのは・・・」

凜「はいっ!」

こ母・*μ*・s「豚のエサアアアアアアアアアア！」
に「ガアアアアアアン!!」

そう言うことり母、そしてほのかたちは空高くへと羽ばたいて
いった・・

に「ぶ、豚のエサあくアアア」その場に崩れ去るにこ

真「にこちゃん・・」

にこを氣遣う真姫。彼女だけは二人の料理を口にしていなかった

に「あれ？真姫：あんたは天道の作った味噌汁口にしてないの？」

真「だって天道の作った料理なんて私毎日食べてるんだから今更必

要ないじゃない。それよりにこちゃん：そんな気を落とさないで・・

に「フンツ！何よ！同情なんてしないで・・こんな勝負を自分から

挑んで負けるような惨めな私なんて・・」

天「そういうのはまだ早いぞ！にこ！」

に「え？」

天「真姫、にこの味噌汁飲んでみたらどうだ？」

そういつて真姫ににこの作った味噌汁を差し出す天道

真「ええ？じゃ、じゃあ一口・・ススス」

に「ふんだ・・どうせ天道の料理を食べて舌の肥えてる真姫からし

たらにこの料理なんて」

ポタン ポタン 真姫の目から涙が溢れ出てきた

真「お、美味しい・・にこちゃんの味噌汁美味しい・・」

に「真姫・・あんた何泣いてるのよ？」

真「わ、わからないけど、美味しすぎて何だか急に涙が・・グスン」

に「ば、馬鹿じゃないの？料理一つで泣くなんて」

天「ススス・・ほう・・やはりな！真姫これをみる？」

にこの味噌汁を口にするなり、鍋の中身を見た天道

真「え？あつ、これは・・トマト？」

鍋の中には皮切りされたトマトがまるまる一つ入っていた

天「皮切りのトマトを入れて出汁をとることで灰汁を解消してやる

だけでなく、他の食材の個性を最大限に引き出しているな！正に完全

調和『パーフェクトハーモニー』だな！この味噌汁の作り方を知って

る者が他にいたとはな」

に「その作り方はママの知り合いにおそわったのよ」

天「ほう・・・そうか・・・」

に「な、何一人で納得してるのよ!」

天「いや別に。しかし真姫、お前が涙するほど美味しいには他に理由がある!それが何だかわかるか?」

真「ええ?いや全然・・・」

すると天道は天を指しながら語り始める

天「おばあちゃんが言っていた・・・どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だってな!」

真「あ、愛情?」

に「なっ／＼／」

天「今回の料理対決、自分の作った料理を真姫に食べてもらい気を引こうと起こしたことだろ?」

真「え／＼／にこちゃん?」

に「べ、別にそんなんじゃない・・・」

天「まったく素直じゃないな。やはりお前達は二人は似たもの同士なようだな」

に「んがっ!あつ、かあああ／＼／」

真「何言ってるのよ!ヴァカなんじゃない?」

天「真姫!たまにはにこの気持ち、素直に受け入れてやったらどうだ?お前が流してるその涙、口ではそう言ってるが本当は嬉しいんじゃないのか?」

真「そ、それは・・・あの・・・にこちゃん・・・ありがとう・・・」

に「ウウウ、こつちこそなんかごめん・・・最近真姫が天道と一緒にいるから・・・そのついムキになっちゃって／＼／」

真「にこちゃん・・・今度二人で買い物行きましょう!最近忙しくてそんな暇なんてなかったし」

に「おおっ!いいじゃない!三越に可愛い服を買いに行くわよ!もちろん真姫のおごりで」

真「ヴェエエ!」

に「冗談よ・・・にっこにこにー」

真「もうっ！にこちゃんてば・・・ウフフフ」

あははは あははは

天「まったく・・・面白いやつらだ！フツ」

にこと真姫の仲むつまじい様子を見て微笑む天道。すると

キュイイイインキュイイイイン

天「？」

天道が振り返るとなにやらカブトゼクターが急かすように天道を呼んでいる

真「天道？それは・・・」

に「それが呼んでるってことはまたワームが？」

天「まだはつきりとはわからんが、ともかく行ってくる！」

真「天道・・・気をつけて」

天「夕飯まだには片付けてくる」

そう言うと天道は現場へ急行した

ブウウウウウン ブンンンン

専用バイク『カブトエクステンダー』に乗ってカブトゼクターが示

す場所に辿り着く。そこには

天「なんだあれは？ワームではないな！」

そこにはワームとはまた別の生命体の姿があった。それは槍をもった灰色の体色をし、集団で人々を襲っていた

人々「キヤアアアアア タスケテエエエエエ ウワアアアアア

ア」

天「何だかわからんがとつと片付けるか！変身！」

ギユイーン ガチャ

《《HEN—SHIN》》

♪BGM FULL FORCE♪

天「キャストオフ！」

《《CAST OFF》》

《《CHANGE BEETLE》》

すぐさまライダーフォームになり怪人達と戦うカブト。一体一体
確実に潰していくカブト!

天「フンツ! ハツ!」

その様子を遠くから眺める一つの影が・・それは黒いローブを纏い
手の中指には赤い仮面を模して彫られた指輪が輝いていて・・

天「クロックアップ!」

《《CLOCK UP》》

♪BGM ライダーキック♪

クロックアップで加速しカブトクナイガン・クナイモードで一気に
怪人達を切り裂きながら・・

《《ONE TWO THREE》》ガチャン

バックル上のボタンを順番に押すと、倒した角を一度もとの場所
にもどす。

そして・・・

天「・・ライダー・キック!」

《《RIDER KICK》》

残った一体に向け必殺のライダーキックを炸裂させる。

《《CLOCK OVER》》

クロックオーバーとともに怪人の集団は大爆発し殲滅した。

天「いったい何だったんだ?」

カブトの戦いを見守っていた謎の影が呟く

??「なるほど・・ここにいたんだな・・俺と同じ・・『仮面ライダー』
が・・」

そう言いつつ変身を解除すると謎の青年の顔が現われ

♪ED きつと青春が聞こえる♪

新「天道!!」遅れながら加賀美が現場に駆けつけた

天「加賀美・・もう片はついた! とりあえず安心しろ!」

新「そうか! ならよかった! ていうか・・お前、その格好なんだ?
プフフとうとうお前もスクールアイドルをh・・」

天「馬鹿を言うな! さあはやく戻って真姫ん家の夕飯の準備だ!」
新「ああくそ、そうだな・・プフフ クス」

天道の派手な衣装姿にずっと笑いをこらえる加賀美、それに苛立つ天道が

天「ことりめ・・今度一回おやつにしてやる・・チュンチュン（
8・）

t o b e c o n t i n u e

にこ 次回のラブライブ！『N I C O i s S H O W T I M

E』

#5 NICCO is SHOW TIME

くBGM イッツシヨータイムく♪

指輪の魔法使い『ウイザード』。彼は漆黒のローブを靡かせながら華麗な蹴り技をグール達に向けて見舞う。そして手にしたウイザードガンとの銃撃と組み合わせながらグールの集団を潰していく。その華麗な動きに圧倒されるガタツクは呆然と見つめている

晴「ハッ！」

新「・・・」すると

天「加賀美！」

新「えっ！・・・あつ・・・お、おう！」

カブトの掛け声と共にガタツクもウイザードに続いて戦闘を再開する。それに対しウイザードが

晴「おっ、いいねえ♪♪よし！共闘と行こうか！」

天「フンツ！ハッ！」

新「フンツ！ハア！オリヤアアアアア！」

晴「ハッ！」

三人の仮面ライダー達の激しい戦闘を繰り広げ先程まで増え続けていたグール達が確実に数を減らしていく。

ミ「チツ！まさか指輪の魔法使いもへこつちの世界へ来ていたとは・・・」

その様子を見ていたミノタウロス。劣勢を悟りはその場から逃走し、それに気がづくウイザード

晴「あつ、待て！クツ！邪魔すんなっての！」

ミノタウロスを追おうとするウイザードだが、行く手をグール達により阻まれる

ミ「フン・・・せいぜい遊んでいろ・・・それよりあの小娘・・・」

ここに視線を向けるミノタウロス。しばらくして姿をくらます

晴「チツ、逃げられたか・・・仕方ない！このグール達をとつと片付けるか」

《キャモナシユータイング！シエイクハナ〜ンズ！フレ〜イム！

シューティングストライク!》

手にしていたウィザードガンハンドオーサーを展開させ左手の指輪をかざし必殺技を決めるウィザード。それにあわせてカブトとガタツクもクナイガンとダブルカリバーで最後の一闪を決める!

《ヒーヒーヒー♪♪ ヒーヒーヒー♪♪》

晴・天・新「ハアアアアアア!!」

グ「ギユアアアアアアア!」

残りのグール達が悲鳴をあげながら爆発し消滅する。

そして戦闘が終わったことを確認し三人のライダーはお互いに向かいあい変身を解除する。しばらくお互いの顔を見合わせたまま沈黙している中、天道が最初に口を開く

天「お前がウィザードとやらの正体か?…ずいぶん若いんだな!」

晴「それはお互い様じゃないかな?あつ、自己紹介が遅れたね。俺の名前『操真晴人』あんたは?」

天「天道総司。天の道を往き、総てを司る男だ。」

晴「プツ、ハハハハ、なるほど!話に聞いてた通り面白い人のようだ」

天「??」

新「それよりもさっきの化け物たちはなんなのか説明してくれよ!それとさっきの君の姿はいつたい?」

真「私たちにも説明して」

絵「そうです。さっきだつてにこが危ない目にあつたんですから」
に「絵里・真姫・」

天「・」

晴「ああ、わかつてるつて。ええと、どこから話そうかな。さっきの奴らは『ファントム』人々の絶望から生まれる怪物たちだ。そしてそのファントムたちと俺はこことは違う〈別の世界〉からやって来たんだ」

新「ええ?」

天「何だと?どういうことだ・」

晴「そうだな・・あれは一週間前・・（俺は自分の世界での最後の戦いを終えて、ある理由で旅にでている途中だった・・）」

回想
とある浜辺

桃色に輝く指輪を目の前に差し出しながら海の方へ目を向ける晴人

晴「うくん、やっぱりここでもなさそうだな・・」

ひとり言を呟いてる晴人の背後から男が近づいてくる

??「よう！操真晴人！」

晴「え？・・俺？ていうかあんた誰？」

士「俺の事はどうでもいい！そんなことより時間が余りないから簡単に説明するぞ！実はお前が今まで戦ってきた『ファントム』の残党がいてだなあ、そいつらが別の世界で暴れているらしい。」

晴「ファントムが？そんな馬鹿な・・いったいやつら何処へ？」

すると晴人にひとつの指輪を差し出す謎の男『門矢 士』

士「この指輪には俺の世界を渡り歩く『力』が宿ってる。これがあればお前は別の世界へと導いてくれるはずだ」

晴「・・世界を渡り歩く・・」

士「じゃあ、後は頼んだぞ」

晴「つておいつ！あんたはいったい？」

士「俺か？俺は・・通りすがりの『仮面ライダー』だ！覚えておけ！」

晴「仮面・・ライダー・・」

士「あつ、ひとつ言い忘れてたことがある！お前がこれから行く世界にも仮面ライダーがいるんだが、どうやらちよつと偉そうに変わった男らしい。まあせいぜい頑張つてな」

晴「・・・」

士から渡された指輪を見つめる晴人

回想終了

新「通りすがりの仮面ライダー・・別の世界・・」

天「・・・」

に「結局それってどういうこと・・・ワームとの戦いが終わったばかりなのに、今度はファントムっていう別の怪物たちが別の世界からやってきてるだなんて・・・」

真「ホント・・・イミワカンナイけど・・・」

絵「この事、ほのかたちが聞いたらなんていうかしら・・・」

自分達の今の状況が理解できず困惑し黙り込む真姫達

晴「安心しろ！もしまたファントムが現れたその時は、俺があんた等守ってやるよ！」

に「えっ？」

そう言うところにこ達に向けて拳を突き出して指輪を輝かせた

晴「俺が・・・最後の希望だ！」

新「うくん・・・なんか前にも同じ光景を見たような・・・なあ天道・・・天道？」

天「・・・」

一人腕組しながら考え事をしながら黙りこむ天道

その翌日、音ノ木坂学院屋上で練習前のストレッチをするほのかたち

ほ「じゃ今度は、その『ファントム』っていう怪物が現われはじめたんだ？」

希「それとそのフェントムを追いかけてまた別の仮面ライダーまで出てきたと！」

海「そんな危険な状況下で私達の今後のアイドル活動に支障来さないか？また不安要素が出てきましたね・・・」

絵「そういうこと・・・だからまた何かあったら天道さん達仮面ライダーに守ってもらえないかねえ」

真「それにこっちに来ているファントムはそんなに数が多いわけじゃないみたい。よ。まあ全部その晴人って人の話だけど」

花「でもその新しい仮面ライダーってのも気になるよね？」

凜「指輪の魔法使いだなんて、なんかおとぎ話の世界みたいだにや
〜」

こ「指輪がアイテムってなんかいいかもねえ。今度の新しい衣装に

取りいれようかな」

海「そんなのんきに捉えられても困りますよ。ことり！」

に「ウィザード・・・最後の希望か・・・」

真「どうしたのにこちゃん？昨日あの晴人って人に助けてもらってから様子がおかしいみたいだけど」

に「ええっ・・・なんでもないわよ！気にしないで」

真「にこちゃん？」

一方、音ノ木の河川敷にて

天「ファントムが人々の絶望から生まれる。そう言ったな？」

晴「ああ、そしてそこから生まれたファントムは自分達の仲間を増やす為にまた別の人間を絶望させ新たなファントムを生み出す。」

天「ということは、ひよつとすると真姫たちもその標的にされる可能性があるということか？」

晴「いや、あくまでもファントムが狙うのは『ゲート』と呼ばれる魔力を持った人間だ。しかし一度ゲートとして狙われた人は執拗に狙われる可能性がある」

天「そうか・・・ではそれがはつきりとするまでは様子を見るしかないのか・・・」

晴「ああ・・・しかし昨日ファントムに捕まってたあのおチビちゃん。もしかしたら・・・」

天「何？どういうことだ！」

そして夕方

練習を終えて帰宅途中のことに真姫。二人はお互い口を聞かずに沈黙している。それに痺れを切らす真姫

真「もう〜いつまでもウジウジしてないで何かしゃべったらどうなの？」

に「別にいじけてたわけじゃないわよ！ただずっと考えごととしてただけよ！」

真「考えごとってなによ？」

に「いいじゃない！真姫には関係ないことよ！」

に・真「ムムムムム」睨み合う二人。そんなとき

ファン「あの・・・μ sの『矢澤にこ』さんと『西木野真姫』さんですよ?」

真「えっ、そうだけど・・・」

ファン「サ、サインいただけませんか? 私ファンなんです!」

そういうと少女はサイン色紙とペンを差し出す

真「えええ! 嬉しいんだけど、今はちよつと・・・」

に「まくたく真姫ちゃんつてば酷いわよねえ。いいわよ♪♪いつも応援ありがとう! 宛名は入れますか?」

真「ちよつとにちちゃん!」

に「いいの! にこたちはいつどんな時でもファンの皆の期待に全力で応えなきゃいけないものよ!」

真「そうかもだけど・・・別にこんなときまで」

に「にこたちアイドルにとつてファンの皆は神様みたいな存在よ! 希望なのよ!」

真「希望つて・・・」

するとファンの女の子の様子が一変して

ファン「フッフ、そうかそれがお前の希望なんだな? 矢澤にこ・・・」

に・真「え?」

ファンの女の子はミノタウロスファントムに変貌した

真「ちよつと・・・嘘でしょ!」

に「ああああ・・・そんな・・・」

ミ「この少女は確かにお前達μ sの熱心なファンだった。しかしお前達が前回のライブ出場を断念し裏切られたと思い込んだこいつはそのまま絶望の淵に立たされ俺というファントムを生み出して消滅したんだ」

真「そ、そんなだつてあれは・・・」

ミ「今更何を言おうと過去のお前達の行動がこの少女の気持ちを裏切り絶望して死んでいったのだ! お前達がこのいたいけな少女を殺したのだ!」

そう叫びながらにこが書いたサイン色紙を破り足で踏みつけた
に(ブツン)

真「え？にこちゃん？」

に「そ・そ、そんな・」

その場で崩れ去るにこ・するとにこの身体から亀裂が生じはじめ真「にこちゃん、しつかりして！どうしてこんな？」

ミ「矢澤にこ、やはりお前が我々ファントムを作り出す『ゲート』だったわけだな。これはいい！さあお前も絶望し新たなファントムを生み出すのだ！ハハハハ」

に「にこたちのせい・大切なファンが・そんな・そんな・私達アイドルは・皆を笑顔に・するはずなのに・」

真「にこちゃん・」

ミノタウロスが真姫の前に立ち

ミ「西木野真姫。お前も矢澤にこ同様、絶望してファントムを生み出すのだ！フハハハハ」

そう言いながら剣を片手に真姫に突きつけるミノタウロス。そこに

バン バン バン

ミ「ぐおおお！くっ！」

真「あ、あなたは！」

操真晴人が天道と共に駆けつけてきた

天「真姫！怪我はないか？」

真「私は大丈夫だけど、にこちゃんが」

晴「一足遅かったか！やっぱりにこちゃんはゲートだったのか！」

天「晴人、このままだとにこはどうなる？」

晴「にこちゃんの肉体は消滅して新たなファントムを生み出す・しかしそうなる前に俺があいつを倒し、にこちゃんを絶望から救う」

晴人はそう言うのと右手に嵌めている指輪をベルトのバックルに当てる

《ドライバーオン！プリクス！》

ミ「フン！いつまでも貴様の相手をしてる暇はない」

晴「俺も同じさ！だからここでお前を片付ける」

ドライバーを起動し左手に指輪を嵌める晴人

《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》
《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》

天「呪文？」

真「やけにやかましいベルトね・・・」

晴「変身・・・」

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー！》

左手に嵌めた指輪をバックルにあて炎の魔方陣が浮かび上がり晴人を魔法使い 《仮面ライダーウィザード》へと姿を変えた

晴「さあ・・・ショータイムだ♪♪」

ミノタウロスにむかって突進するウィザードフレイムスタイル

ミ「く！このおおおおお！」

晴「フン！ハア！」

ミノタウロスの剣戟を演舞をするかのような華麗な動きで交わりながら蹴り技へと繋いでいく

《コネクト！プリ〜ズ！》

魔方陣から専用武器ウィザードソードガンを取り出しミノタウロスを切り裂いていくウィザード

ミ「ぐぬぬ、こいつらが相手だ！」

ミノタウロスがグールを召還しウィザードを囲う。

ミ「フン！やれ！」

キュイイイインキュイイイン ブウウウウウン ガシッ！！

天「変身!!」

ギユイーン ガチャ

《HEN—SHIN》

《CAST OFF》

《CHANGE BEETLE》

するとすかさず天道が変身し戦闘に加わってくる

晴「天道・・・なんだスケツトかい？」

天「時間がないんだろ？早くあいつを倒せ！ここは俺が片付ける！」

真「にこちゃん！にこちゃん！しつかり」

に「あああ・・・あああ・・・」

にこに生じた亀裂がどんどん肥大化していく

天「行くぞ！」

晴「ああ！」

ウィザードがミノタウロスを、カブトがグールの集団を。二人の仮面ライダーが怪人達との激しい戦いが繰り広げられる中、にこは・・・

に（にこは・・・にこは・・・）

にこの中でこれまで起きたことがヴィジョンとして流れた。一年生の頃アイドルに憧れてクラスメイトと共にアイドル研究部を立ち上げたが、一人また一人辞めていき孤独に苛まれ続け、三年生になつて夢を諦めかけていたころ真姫やほのか達 μ 、sと出会い再び夢に向かつて走り続けていこうとしていた。

ほ（一生懸命頑張つて、今、私達がここにいる。この想いをいつかみんなに届けるって！だから私達はまた駆け出します。新しい夢に向かつて）

絵「にこ」

海「にこ」

花「にこちゃん」

凜「にこちゃん」

希「にこっち」

こ「にこちゃん」

ほ「にこちゃん」

真「にこちゃん!!」

μ 、s「 μ 、s！ミュージックスタート！」

パアアアアアにこの中の闇が光に照らされいき

に「そうよ・・・どんなに辛いことがあったとしても・・・誰かを傷つけ・・・傷つけられたとしても・・・今の私には μ 、sのみんながいる。」

真「にこちゃん？」

に「真姫・・・私はね・・・ μ 、sがある限り・・・みんなとスクールア

アイドルをしている限り・・・どんなにことがあろうと決して絶望したり
なんかしない・・・宇宙No.1スーパーアイドルにこーは・・・全宇宙の
皆を笑顔にできるその日が来るまで・・・私は・・・私は・・・夢を諦めな
い!!絶望なんてしない・・・私も・・・皆の『希望』になってやるんだか
ら!!」

パアアアアア ピカアアアアア

にこから眩いばかりの光が溢れ出てきた

ミ「?」

天「なんだ?」

晴「にこちゃん・・・まさかファントムを押さえ込んだ?」

真「にこちゃん!大丈夫なの?」

に「ハアハア ハアハア 真姫・・・」

真「にこちゃんぐスン無事でよかった」

にこを抱きしめ泣きじやくる真姫

その様子を見ていたミノタウロスは憤慨する

ミ「おのれえ・・・これではファントムが生まれない・・・撤退だ」

晴「待て!逃がすか!」

《コネクトープリ〜ズ!》

逃走するミノタウロスを追ってウイザードは専用バイク『マシン
ウインガー』を走らせ追跡をする。一方カブトはグループの集団を一掃
し終えようとしていた。

天「ハアアア!」

ライダーキックで残りのグループを撃破!変身解除しにこたちの元
へ駆け寄る

天「にこ・・・真姫・・・無事か?」

真「ええ、なんとか。それよりにこちゃんが・・・」

に「にこの身体一体どうなっちゃったの?」

絶望の淵を自ら振り切ったにこ。その身体にどんな変化が?

t o b e c o n t i n u e

次回予告

デデーン

♪ BGM NEXT LEVEL ♪

ナレーシヨン「仮面ライダーカブト!!」

ミ「再びお前を絶望の淵に立たせて今度こそファントムを・・・」

に「真姫ちゃん!こはね・・・」

晴「君に頼みがある・・・」

に「μ'sの・・・皆の・・・」

真「にこちゃん・・・嘘よね・・・嘘だと言って!!にこちやああん!」

に「私が・・・『最後の希望』よ!」

ナレーシヨン「天の道を往き総てを司る!!」

に「さあ・・・シヨータムよ♪♪」

#6 魔法使い《ウイザード》はじめました!

キーンコーン カーンコーン

翌日・音ノ木坂学院にこのいる教室

希「にこつち」

に「希」

希「真姫ちゃんから聞いたで。昨日またファントムに襲われてえらい目あったって」

に「ああ〜そうだけど、自分の意思でファントムは抑え込んだし、心配ないわ!」

希「そやけど、今日は無理せんと帰ったほうがええんちゃう?」

に「何言ってるのよ!そんな事してられないわ!それに来週はライブよ!今日練習頑張らないとね!にっこにっこに〜♪」

希「にこつち・・・」

にこを心配する希、その様子を廊下から見ている絵里の姿も

放課後、屋上にて練習に励む μ 、sの9人

パンパンパンパン《手拍子音》

海「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 1, 2, 3, 4, 5, 6,
7, 8」

屋上にてダンスレッスン中の μ 、s。真姫はずっとにこのほうを気にしている

海「真姫!タイミングずれてきてますよ!」

真「あつ。はい!」

海「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8 1, 2, 3, 4, 5, 6,
7, 8 ラストー!!」

μ 、s ハアハアハアハア・・・

休憩している真姫のところに声をかけるにこ

に「まったく・・・にこは大丈夫だって言ってるじゃない!気にしすぎよー!」

真「べ、別に気にしてなんて・・・ごめん・・・嘘、本当はすごく心配。」

にこちゃんが大変な目に遭ったのに私何もできなかつた・・・」

に「んなつ、あんたにしては珍しく素直ね」

絵「そういえばあれから天道さんは何か言ってた？」

真「あれから組織を総動員してファントム殲滅に当たってるって言ってたわ。でも倒すのはグールだけであのファントムは見つかつてないみたい・・・」

絵「そう・・・」

ほ「うくん、このまま来週のライブして大丈夫なのかな？ワームの時は天道さんたちに助けてもらえたけど今度はまた別だからなあ」

こ「ほのかちゃん」

に「ダメよ！まったくなんであんたはすぐそんな事考えるのよ！なんの為にここまで練習してきたと思ってるのよ！」

ほ「にこちゃん」

に「ワームやファントムのことはこれからも天道たち仮面ライダーに任せるしかないじゃない！今の私たちはアイドル活動に専念するしかないのよ！そしてこれからファンの皆に笑顔を届けるのよ！」

凜「怖い目にあつたはずなのに・・・にこちゃんてやつぱりすごいよねかよちん」

花「うん、私だつたら絶望してそのまま終わっちゃうよ・・・ウウウ」

凜「かよちんは凜が守つてあげるから平気にや」

花「凜ちゃん・・・」

海「にこの言うとおりですね！守つてばかりもらつて申し訳ない気がします。今後も怪物たちの事は天道さんたちにお願ひして私たちはライブに向けて練習に励みましょう」

μ, s「うん！」

真「・・・」

その夜、真姫の家。夕食を済ませ自室で考え込む真姫。すると

コン コン

天「入るぞ」

真「天道・・・」

天「大丈夫か・・・」

真「全然大丈夫じゃないわよ！私にとってμ、sのみんなは大切な存在なの。一人でもかけちゃダメなの！なのににこちゃんがあんな事になって、今回は何とかなったけど次はどうなるかわからないのよ！なのに私は何もできなかった：それがとても辛いよ：グスっ：」
天「・・・すまない」

真「なんであんたが謝るのよ！」

天「・・・何としても・・・ファントムたちは俺たちが倒す！」
時を同じくして、神田川に架かる万世橋にて

晴「やあにこちゃん！まさか君から呼び出してもらうなんて思ってたよ」

に「操真晴人・・・あなたにお願いがあるの・・・」

晴「・・・」

に「・・・」

秋葉原UDX。ライブモニターにμ、sのライブ映像が流れてる。それを見つめているミノタウロスが変装しているあの少女がいた。

ミ「そうか・・・そうだったのか・・・フッフ・・・フハハハハ」

μ、s「ラブライブ！」♪♪

(CM前のアレ) 後半へ続く

花「ううううう・・・わああああああ、可愛い！ええと、でんでんでのブルーレイは今日こそ売ってるかなあ？」

凜「かよちゃんは相変わらずアイドルのこととなると別人みたいにや」
〜

に「あああああ、宇宙No.1アイドルにこにこちゃんグッズが更新されてる♪♪」

真「相変わらずすごい数のグッズよね〜アキバのアイドルショップ！この間のμ、sのライブの時のやつがもう出てるなんて」

絵「じゃあ真姫、私たちはあつちのほうで買出ししてくるから」

真「わかったわ！お願い」

ほ「じゃあみんな、また後で集合ね！」

ほのかたち9人はライブにむけての衣装の買出しで秋葉原に来ている。真姫・にこ・花陽・凜の班とほのか・海未・ことり・絵里・希

の班と別行動をとっている

に「いやあく秋葉に来るといつい立ち寄ってしまうわね」

花「ううう・・・でんでんでん・・・泣」

凜「かよちん落ち込むことないにやゝまた今度来たときにでも探そう」

真「まったく、衣装の買出しにきたはずでしょ！急がないとほのかたちと集合時間に遅れるわよ！」

花「わかってるよ・・・ごめんね真姫ちゃん」

凜「あれ？なんか様子がおかしくないかにや？」

真「おかしいって何がよ？」

凜「街中を歩いているはずなのに、何か凜たち以外人が・・・」

に「いない・・・」

アイドルシヨップでの買い物を終えて、秋葉原UDXのテラスを歩いている真姫たち4人。しかし真姫たち以外に廻りには人が一人もいない。そして異様な空気がどこかしら漂い始めてきて

真「本当だわ！どういうこと？」

花「ええええええ！何が起こってるのお・・・ああ・・・タスケテ」

ミ「チョットマツテテ・・・なんて、助けを呼んでも誰も来ないぞ！」

に「あんたは・・・」

ミノタウロスが変身したファンの女の子がにこたちの目の前に現れた

ミ「ここで再びお前を絶望の淵に立たせて今度こそファントムを生み出してもらおうぞ！こいつらとともにな！」

凜「ええっ！」

ほ・絵・海・こ・希「きやああああ！」

グルルたちが拘束されたほのか達を連れてやってくる

真「ほのかあ！」

凜「海ちゃん、ことりちゃん！」

花「絵里ちゃん、希ちゃん！」

に「あんた、絵里たちになんて酷いことを・・・」

ミ「ククク、ここでお前9人が絶望すれば9体分のフアントムが生まれる！こんな機会はそうめつたにないからな！フハハハハ」

μ，s「ええええええ！」

に「という事は私たちμ，s全員が『ゲート』だったってこと？」
ほ「じゃあほのかたちもにこちゃんと同じ魔力をもってるってこと？」

ミ「そういうことだ！フフフフフ、フハハハハハハ」

高笑いをしながら少女はミノタウロスの姿に変貌を遂げた

μ，s「きやあああああ！」

グールに囲まれ悲鳴をあげる9人

海「秋葉の街にこんなにいっぱい怪物たちが・・・」

こ「どうして今日は天道さんたち来ないの？」

ミ「それはな、このアキバ周辺には魔力結界を張っている。あの指輪の魔法使いでさえ破るのは容易ではない！フハハハハハ！」

希「そんな・・・」

ミ「諦めろ！お前たちのスクールアイドル活動も今日でお終いだ！」

右手にエネルギーを集め火球を作り出す。

絵「みんな危ない！伏せて！」

ミ「安心しろ！殺しまではしない！この攻撃でお前たちをいたぶって恐怖のドン底に落としてやる！それだけだ！」

に「・・・」

ミ「喰らええええええええ！」

火球攻撃を繰り出すミノタウロス

μ，s「きやあああああ！」

真（もう、今度こそ本当の本当にダメかも・・・）

火球がほのか達に直撃寸前まで迫ってきたとき、呪文のようなものが流れる

《ディフェンド！プリクズ！》

ミ「何!!」

真「え？」

絵「にこ・・・」

希「にこつち・・・？」

ミノタウロスの放った火球攻撃をにこが魔方陣の盾で防ぐ。その様子を見て驚く。sのメンバー。そしてにこの指には晴人と同じウィザードリングが嵌められている。

に「ふん！残念だったわねフアントムさん！あんたの思惑通りにはさせないわよ！」

花「に、にこちゃん？」

ミ「お前今の魔法・・・もしかして貴様！」

に「そうよ！そのまさかよ！」

そう言うとはこは腰に巻かれたベルトのバックルに右手を当てる

《ドライバーオン！プリズ！》

真「にこちゃんそのベルト！」

絵「どうということよにこ！」

に「・・・」

回想

に「晴人、お願い。私をあなたと同じ魔法使いにしてほしいの。あなたのように仮面ライダーとしての力が欲しいのよ！」

晴「にこちゃん、簡単に言うけど魔法を使うのは結構疲れるんだよ！それに君はアイドル。人々を笑顔にするのが君の本当の使命だろ。そんな君が戦いに身を投じるなんて、もし万が一何かあったら君の間やファンの人たちが悲しむ。」

に「だからこそよ」

晴「にこちゃん・・・」

に「私があのととき絶望しなかったのは、sとの出会いやファンの皆の応援が心の支えになったからなの。みんなが私にとっての『希望』なの！だから今度はにこが皆の『希望』になりたいの！わたしの、私たち9人の力で『笑顔』という名の『希望』をこれからもみんなに伝えていきたいの！でもそれを脅かす化け物たちがまた現れてなにもできないまま脅えるだけじゃダメなの！私も戦うときには戦って皆を守りたい！だから・・・だから・・・晴人!!」

にこの決意の眼差しを目の前にして晴人が口を開いた

晴「にこちゃん・・わかった!」

《コネクト！プリクズ!》

魔方阵から変身ベルト『ウィザードライバー』を取り出す晴人。そのままにこに手渡す

に「これが・・魔法使いになるためのベルト・・」

晴「にこちゃん左手を出して」

言われた通りに左手を晴人に差し出すにこ

《クリエイト！プリクズ!》

にこの全身から光が満ち溢れその輝きはひとつの指輪を形成していく。それは晴人がしているフレイムウィザードリングと同じ形をしたものだった

に「にこの魔力が具現化したもの」

晴「にこちゃん・・君に頼みがある・・」

に「何?」

晴「何があろうと決して諦めないでほしい。戦いの中でどうしても辛いことや悲しいことがおこると思う。けどそれでも希望だけは捨てないでほしい。そうすれば君の中にいるファントムも力を貸してくれるはずだ!そのことを忘れないでくれ!」

に「わかったわ!約束する!」

回想終了

希「にこつち・・まさか魔法使いに」

真「そんな・・ダメよにこちゃん!にこちゃんが戦う必要なんてないじゃない!ここで戦って死んじゃったりしたら残された私たちはどうすればいいのよ!一人でもかけたらμ sはμ sでなくなっちゃうのよ!」

に「真姫ちゃん!にこはね・・μ sの皆のみんなが心に支えになったから絶望せずにすんだの!μ sと出会いが荒んだ私の心を救ってくれたの!μ sのみんなの存在が私の『希望』になったの。だから今度は私が皆の事を守りたいの!」

真「にこちゃん・・」

に「そうよ・・・私が『最後の希望』よ！」

ドライバーを起動し左手に指輪を嵌めるにこ

《♪♪♪シャバドウビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》

《♪♪♪シャバドウビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》

に「変身・・・」

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー！》

左手に嵌めた指輪をバックルにあて炎の魔方陣が浮かび上がり晴人を魔法使い《仮面ライダーウィザード》へと姿を変えた。その姿は晴人が変身したフレイムスタイルと同じだが若干ピンクに近いカラーリングになっている

ミ「まさか貴様も魔法使いになるとは・・・ぐぬぬ」

に「さあ・・・ショータイムよ♪♪」

〜BGM イッツショータイム〜♪

ミ「うおおおおお！」

に「はああああああ！」

ミノタウロスの突進攻撃を迎え撃つにの变身したウィザード。華麗なエクストリームマーシャルアーツを駆使してけり技を決めていくにこ

に「はあつ！とおおお！につこー！」

ミ「うおおおおお！クツ！」

《コネクトープリ〜ズ！》

ウィザードソードガンを取り出しミノタウロスを切り裂く

こ「にこちゃん・・・すごい」

絵「にこにこんな戦闘スキルがあったなんてびっくりだわ！」

凜「当然だにゃ！なんせにこちゃんは宇宙No.1アイドルだからね

〜

ミ「チツ！グール共っ！」

グールの集団がにこウィザード周辺を円を描くように囲った

に「厄介ね、けど数だけならこつちにも手があるのよ！」

そう言うとう右手の指にウィザードリングを嵌める

《♪♪〜ルパッチマジック タッチゴ〜♪♪》
《♪♪〜ルパッチマジック タッチゴ〜♪♪》
《コピー！プリ〜ズ！》
《コピー！プリ〜ズ！》
《コピー！プリ〜ズ！》
《コピー！プリ〜ズ！》

コピー能力の魔法を使い自分の分身を複数作るにこウイザード
ほ「にこちゃんが増えた〜」

絵「流石魔法ね、ハラシヨ〜」

シャキーン ウイザーソードガンをソードモードからガンモード
へ切り替える

に「はああああ！」

バン バン バン バン

バン バン バン バン

グ「グギユアアアアアアア」

こ「すごい！あんなにいた怪人が一瞬で！」

ミ「クツソオオオオ！」

三度逃走を図るミノタウロス。

に「逃がさないわよ」

《バインドープリ〜ズ！》

海「今度は拘束魔法ですね！」

複数の魔方陣から鎖を伸ばし逃げるミノタウロスを拘束する

ミ「グオオオオ！動けん」

希「敵の動きが止まった！」

花「にこちゃん！」

凜「今こそ止めにや！」

に「フィナーレよ！♪♪」

《♪♪〜ルパッチマジック タッチゴ〜♪♪》

《♪♪〜ルパッチマジック タッチゴ〜♪♪》

《♪♪チヨイイネ キックストライク！サイコ〜♪♪》

にこウイザードの足元に魔方陣が浮かびそこから炎系魔力が右足に収束される。それに合わせてくるりと一回転し構えのポーズをとる

に「はあああああ！フン！」

そこからロンダートとバクテンを組み合わせて高くジャンプする。そして

に「にこおおおおお！」

動けないミノタウロスに華麗な飛び蹴りを喰らわすにこウイザード

ド
ミ「しまっ！グワアアアアアアアア」

ドガアアアアアアアン

必殺技ストライクウイザードをまともに喰らったミノタウロスは断末魔の叫び声をあげながら爆発する

に「にこ♪」

ミノタウロスを倒すのを確認するといつもの『につこにつこにー』のポーズをとるにこ。ビジュアル的に違和感だらけである

μ s 「やったああああ♪♪」

希「にこつちほんま凄いやん！」

花「最後の必殺技カッコよかった！」

凜「凜も真似したいにや〜！」

ほ「いつの間に変身能力身に着けたの？」

絵「その前ににこ！身体大丈夫なの？」

こ「なんか今度の衣装の参考にさせてほしいな！」

海「こんな時まで衣装ですかことり？」

に「ちよつとあんたたち！皆して一斉に話しかけないでよ！リアクションに困るじゃない！わかったわかった！一人ずつ説明するから！」

真「そんなことよりみんな!!」

μ s 「え？」

真「見て！」

μ s 「あっ!!」

ほのかたち見上げると上空に巨大な魔方陣が浮かび上がっていたに「どうして?」

希「ファントムは倒したはずなのに、どうして?」

同じころ秋葉原UDXビルの屋上にて、黄金に輝くファントム・ドレイクが立っていた

?? 「時は満ちた!今度こそ私の野望を成し遂げて見せる!」

晴 「そうはさせない!」

?? 「何?」

晴 「はああああ!」

バン バン バン バン

?? 「クッ!」

晴 「まさかお前が!生きていたのか?」

?? 「久しぶりだな!操真晴人!私が張った結界を破ってきたんですか?ハハハでももう遅いですよ」

天 「晴人・・・こいつは?」

晴 「かつて俺が倒したはずのファントム・・・いや・・・」

ドライバーを起動し左手に指輪を嵌めるファントム

《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン〜♪♪》

《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン〜♪♪》

?? 「変身・・・」

《チェンジ!ナウ!》

ファントムはドライバーを起動させ指輪の力で金色の魔法使い仮面ライダーソーサラーに変身した

晴 「金色の魔法使い!!」

天 「晴人」

晴 「ああ・・・わかってる!」

ドライバーを起動し左手に指輪を嵌める晴人

《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン〜♪♪》

《♪♪♪シャバドゥビタツチ ヘンシ〜ン〜♪♪》

天 「変身!」

ギュイーン ガチャ

《《HEN—SHIN》》

《《CAST OFF》》

《《CHANGE BEETLE》》

晴「変身・・・」

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー！》

〜ED きつと青春が聞こえる〜♪♪

天道と晴人はそれぞれカブトとウィザードに変身してソーサラー
に向かって攻撃を仕掛ける

ソ「さあ〜お楽しみはここからだ！」

天・晴「はあああああ！」

次回＜ウィザード編＞完結

to be continue

真姫 次回のラブライブ！『希望のうた』

のうた

回想シーン

に「変身・・・」

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー！》

ミ「まさか貴様も魔法使いになるとは・・・ぐぬぬ」
に「さあ・・・シヨータムよ♪♪」

《チェンジ！ナウ！》

天「変身！」

ギユイーン ガチャ

H·E·N·|·S·H·I·N·

C·A·S·T·O·F·

C·H·A·N·G·E·B·E·E·T·L·E·

晴「変身・・・」

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー！》

天道と晴人はそれぞれカブトとウイザードに変身してソーサラー
に向かって攻撃を仕掛ける

ソ「フツ！」

天・晴「はあああああ！」

コネクト！ナウ！

巨大な斧『デイスハルバート』を取り出しカブト・ウイザードと
交戦を開始するソーサラー

シャキイイイイイン キン キン

天「フツ！」

晴「ハアツツ！」

カブト・ウイザードの剣戟を受け止め跳ね返すソーサラー。その反
動による回転でカブトはクナイガンガンモードに切り替え銃撃を与

える

ソ「ぬうおおお！チツ！」

そこから間髪入れずにウイザードが斬りかかる
シャキイイイン

ソ「調子にのるなあああ！」

《ライトニング！ナウ！》

激しい電撃攻撃を繰り返すソーサラー。それをまともに喰らって
しまうカブト・ウイザード

天・晴「クツ！うわあああああ！」

晴「こうなったらあ」

左手の指輪を切り替えるウイザード

《フレ〜イム！ドラゴン！》

《ボーボー　ボーボーボー！》

フレイムスタイルの強化形態『フレイムドラゴン』にパワーアップ
するウイザード

《♪♪チヨイイネ　スペシャル！サイコ〜♪♪》

胸部にドラゴンの力を宿し『ドラゴスカル』を発動させ必殺の《ド
ラゴンブレス》を繰り返す

ソ「そう来ると思ったわ！」

《コネクト！ナウ！》

魔方阵を発動しフレイムドラゴンの放った炎を取り込むソーサ
ラー

晴「!?まさか？」

するとカブトの背後から魔方阵が現れ今しがた取り込まれたドラ
ゴンブレスが放たれた

天「!?うわあああああああ！」

晴「天道!!」

ドラゴンブレスの直撃を喰らったカブトはビルの屋上から吹き飛
ばされ、そのまま落ちていく

天「うあああああああ！」

晴「天道！てんどおおおおお！」

♪♪♪デン デデデン デッデッデン デデーん♪♪
♪♪♪OP NEXT LEVEL♪♪
秋葉UDX・・・

ウイザードに変身しミノタウロスファントムを倒したにこ、その様子を見守り戦いに勝利したにこを祝福する真姫たち、sの9人だったが、喜びのつかの間再び彼女たちの周りにはグールの集団が現れた

ほ「ちよつと！またこいつら!？」

こ「にこちゃんが今倒したばかりなのに・・・どうして？」

海「早く天道さんたちを呼ばないと」

希「駄目や！電話してもつながらん！」

凜「かよちん・・・」

花「タスケテ・・・」

に「こうなったらまた変身して倒すしかないわね！」

にこは再び変身しようとウイザードリングをベルトにかざすが、

《エラー！》

に「え？どうして?・・・うううっつ！」

突然ふらつき膝を着いてしまうにこ

絵「にこ?」

に「ははは・・・はあ・・・はあ・・・どうやら・・・魔力切れ・・・てわけ

ね・・・」

とそのまま気を失うにこ

絵「にこ!!」

真「にこちゃん!!」

にこが倒れると同時にグールたちが一気にほのかたち9人に襲い

掛かる！

シユアアアアアアア!

海「絵里!!グールたちが」

絵「みんな!!ここはバラバラに散って逃げるわよ!」

絵里の合図で絵里・真姫・にこ、ほのか・ことり・花陽、海未・希・

凜の3組ずつに別れ逃げていく

ほ「絵里ちゃん!!」

絵「にこは私と真姫で連れて行くわ! 私たちに構わず逃げて!」

こ「ほのかちゃん!! 早くこっちに!」

希「エリチ! 無茶したらアカンよ!」

凜「かよちゃん! あとで必ず迎えに行くから!」

花「凜ちやああああん!」

海「希! 凜! こっちです!」

真「にこちゃん! ねえにこちゃんしつかり!」

に「うううう・・・」

絵里と真姫に抱えられながらうなされるにこ

ほ「みんな!! 絶対死なないで!」

最後のほのかの叫び声にコクリとうなずくメンバー、そして屋上で
は・・・

晴「くっ・・・天道・・・」

ソ「まず一人・・・次はお前だ、ウィザード・・・と言いたいところだが、いつまでもお前一人に構ってられないのでな!」

《クリエイト! ナウ》

かつてウィザードによって倒されたファントム達を召還するソー
サラー

晴「やはりミノタウロスを復活させたのもお前だったのか?」

ソ「そういうことだ! さて、貴様の相手はこいつらがしてくれるわ!
! 私はあるの小娘達に用があるのでなあ!」

晴「待て!」

ソーサラーはウィザードに背を向けその場を去る。ウィザードの
行く手を阻む『ヘルハウンド』、『ケットシー』、『ノーム』、『ガーゴイ
ル』

晴「時間がない! こうなれば一気に片付けてやる!」

そういうとウィザードは魔方陣から魔法具である『ドラゴタイ
マー』を取り出し右腕に嵌める

《コネクト! プリ〜ズ!》

《セットアップ! スタート》

ドラゴタイマーのレバーを押して起動させる。すると

《ウォータードラゴン!》

《ハリケーンドラゴン!》

《ランドドラゴン!》

ドラゴン強化形態のウォーター・ハリケーン・ランドを召還する
ウイザード

晴フ・ウオ・ハ・ラ

「ハアアアアアアアアア!」

4人のドラゴン達の乱舞による攻撃で圧倒されるファントム達。
ファントム達

「グギユアアアアアア!」

晴フ・ウオ・ハ・ラ

「ファイナレだ!」

《キャモナスラツシユ シェイクハンズ♪♪》

ソードガンを掲げ必殺技を発動させるドラゴン達

《フレーム!》《ウォーター!》《ハリケーン!》《ランド!》

《スラツシユストライク!》

晴フ・ウオ・ハ・ラ

「ハッ!」各属性の力を宿した斬撃をファントム達に向けて放つウイザード!

ファントム達

ギヤアアアアアアアア

ドラゴン達に瞬殺されるファントム達、断末魔の悲鳴をあげ爆発する

晴 「天道・・・にこちゃん!無事でいてくれ!はあ!」

《ハリケーン!プリーズ!》

ハリケーンスタイルにエレメント変化し飛行能力でビルの屋上から降下するウイザード

晴 「?!」

下に降りると、地面に大きな穴が開いていて、それは地下階まで続いていた。どうやらカブトが落下したときに空いたものようだ

晴「これは・・・天道・・・？」

そのころUDXビルの中を逃げ回る凜・海未・希の三人

海「ハア・・・ハア・・・まだ追いかけて来ますよ!!」

凜「ハア・・・ハア・・・海未ちゃん、希ちゃん急いで！」

希「・・・ハア・・・ハア・・・にこつちみたいに魔法使えたら、空にでも飛んで逃げるのに・・・」

凜「そんな無茶な！凜たちにはにこちゃんみたいに变身すれば話は変わるけど・・・うん？へん・・・!!あああああああああ！」

突然何かを思い出し叫ぶ凜、そして急に立ち止まる！

海「何ですか！凜」

希「突然足止めて？ほらっ、怪物たちに追いつかれるでえ」

凜「つていうか・・・凜たちも变身して戦えばいいんだよ！」

海・希「え？・・・あ・・・」

凜、海未、希の3人は自分達がそれぞれ『ザビー』、『ドレイク』、『ソード』に変身できるようになったことを思い出す※SS#4～#6
参照

希「でも凜ちゃん！变身しようにも今ここ結界が張られてるんやで！ゼクターだつてここまでは・・・」

??「その心配はないぞ！ノゾミくヌ！」

希「その声は？」

すると突然地面からサソードゼクターが、そしてその後ろからザビーゼクターとドレイクゼクターも続けて現れる

希「剣さん？でもどうやって？」

剣「結界の届かない地下深くを掘り進んで来たのだ！なんせ俺は穴掘りにおいても頂点に立つ男だからな！ハハハハハハ」

凜「希ちゃん！海未ちゃん！」

希・海「うん・ええ！」

凜・希・海未の三人はワームたちの前に立ちはだかり、それぞれのゼクターを掲げながら叫んだ

凜・希・海「变身!!」

ゼクターを各々のツールに装着し三人の体が装甲に包まれる

H·E·N·|·S·H·I·N·

凜・希・海「キャストオフ!!」

C·A·S·T·O·F·F·

C·H·A·N·G·E·

W·A·S·P·!·D·R·A·G·O·N·F·L·Y·!·S·C·O·R·P·I·O·N·!

凜・海未・希の三人は仮面ライダーザビー・ドレイク・サソードに変身!向かってくるグール達を迎え撃つ

シャキン!キーン!ズバツ!

剣「ノゾミーヌ!今日の敵は前より多いな!」

希「せやでえ!なんや剣さん、もしかしてくおじけづいたん?」

剣「何を馬鹿な!逆に戦いがいがあるというものだ!すべてのワーム・・じゃないこの怪物たちは俺が倒す!」

希「それを言うならうちらが!やろ?」

剣「ノゾミーヌ!それは誰かの受け売りかい?」笑

希と剣が話しながら戦ってる中、凜ザビーのパンチ攻撃が炸裂しグールたちにダメージを与える

凜「にゃくん!変身しちやえばこんなやつえらたいしたことないにゃ!」

グ「ぎやあああああああ」

凜が変身したザビーはみるみるうちにグール達蹴散らしていくズバババババババババ

激しい銃撃を繰り出す海未ドレイク

海「これで最後です!はあああああああ!」

残り数が減ったグールたちを一気にたたみかける三人

海・凜・希「はあああああああ!」

ドガアアアアアアアアアーン!

凜「やった!よーし!このままかよちんたちの所へ・・・」

海「凜・・希・・・」

喜びもつかの間、海未が何かの存在に気づく

凜・希「え?」

グール達を倒した海未たちの目の前に金色の魔法使いソーサラー

が現れた

ソ「ふん：まさかお前たちも仮面ライダーに変身できるとはな：ハハハハ・・・生贄にするには充分だな」

凧「なっ・・・凧たちを生贄って」

海「凧・希・・・これは油断なりませんよ!」

剣「ノゾミーヌ・・・ここは退いたほうがいい気がする!この敵は強い・・・」

希「剣さん・・・?」

凧「クツ!こうしている間にもかよちん達が危ない目にあつてるに」

海「そうですが・・・」

希「凧ちゃん!さすがにここは撤退したほうが?」

海「希・・・」

そのとき凧が単身突っ込んでいく

凧「もういいにや!こうなったら凧が一人で行くにや!」

海「凧!!しようがないですね!」

希「海未ちゃん!!・・・しゃあないなあ、もう!」

凧に続いて海未もソーサラーに向かつていき、希もそれを追うように走り出した。そのとき剣が勢いよく叫んだ

剣「待て!三人とも、早まるな!」

海・凧・希「はあああああああ!」

三人が一斉にソーサラーに飛び掛る!

ソ「フフフフ・・・馬鹿めが!」

右手の指輪を攻撃魔法の物に嵌め替えて

《エクスプロージョン!ナウ!》

一方・・・

花「はあ・・・はあ・・・ああ・・・ああ・・・ダレカタスケテ!」

毎度おなじみの台詞をいつも以上に泣き叫びながら助けを求める

花陽

「こ」がんばって花陽ちゃん!もうじき天道さんたちが来てくれるから」

花「でもここ結界張られてるんだよ！いくら天道さんでも」

ほ「大丈夫だよ、花陽ちゃん！天道さんなら必ず来るよ！それにある魔法使いさんだっているし・・・うわっつ」

こ・花「ほのかちゃん!!」

ほ「いったあゝ・・・ああ！行き止まり！」

通路が途切れとうとうグールに追い込まれたほのか・ことり・花陽
シャアアアアア

こ「これはもう・・・本当にダメかも・・・」

ほ「くっ！」

一人拳を握りしめるほのか

こ・花「ああ・・・ああああ・・・タスケテエエエエエ！」

シユアアアアアアアアアア！ほのかたちに飛びかかるグール！

そして絵里たち三人は

に「うううう・・・うくん」

真「にこちゃん・・・まだ気を失ってるの？」

絵「無理も無いわ！魔法使いに変身してあの大勢の怪物たちと戦えばこうなるわよ！」

真姫・絵里は気絶したにこを連れて地下階段のデッドスペースに隠れてはしているが、すぐそばにグールたちがいる為、動けないでいる

絵「ずっとこのままここにいてもいずれ見つかるわね！」

真「だからってこれ以上にこちゃんを動かせないわよ！」

絵「それはそうだけど・・・!!真姫見て！」

真「これは・・・」

絵里と真姫は自分たちの足元に地下へと通ずる入り口を見つける

！

絵「ここから地下通路へ抜けられるかも！」

真「でもにこちゃんがまだうごけ・・・」

に「大丈夫よ！ちよつと寝たら気分がよくなったわ！」

真「にこちゃん・・・気がついたの？」

絵「にこ・・・本当にもう動けるの？」

に「大丈夫だつて言ってるじゃないの！魔法使いをなめないでよね

！」

真「初戦の後にそんなにばててよく言うわよ！」

に「なっ！悪かったわねえ！」

絵「それだけおしやべりする元気があれば心配ないわね！とりあえず今はここから移動しましよ！」

に・真「ええ！」

地下の通路を渡っていく三人。すると段々と狭い通路が広くなつていきさらに進むと真姫たちの目の前に奇妙な機械仕掛けの柱が立っていた

絵「え？ちよつとこれって？」

に「なんなのこの不気味な装置・・・」

真「なんかのエネルギーを集める装置みたいね！」

ソ「それは貴様らから魔力を奪うための『タナトスの器』だ」

真姫たちの前に人間体に姿を変えたソーサラーがいた

に「なっ！あんたはいったい？」

ソ「わたしは以前ウィザードに倒され怨念となつて蘇つたファントムだ！」

そう言いながら一瞬だけファントム『ドレイク』の姿に変化するソーサラー

真「なっ！ファントムって？」

絵「それよりわたしから魔力を奪うって？」

ソ「貴様らは自分たちがファントムを生み為の存在『ゲート』。そのお前たちの魔力をこの装置が吸収、人間をファントムへと変貌させるエネルギーを作り出すのさ

！」

に・真・絵「なんですって！」

真「人間をファントムに？」

絵「そんなことをしたらこの音ノ木は・・・」

に「仮にこいつで魔力を奪われた人間はどうなるの？」

ソ「どうもしないさ。お前たちはこの『タナトスの器』によって魔力を吸収されそのまま朽ち果てるだけさ！ハハハハ！ここにいるお

前らの仲間と共にな！」

するとグールたちがボロボロな状態の海未・凜・希を連れてくる

凜・海・希「きやつ！」

絵里「希！」

真「海未！」

に「凜！」

海「うううう……」

希「エリチ……ごめん……うちら、ちょっと無理しすぎてもうた」

凜「みんな……ごめんによ」

ソ「ふふふ……残りの三人もじきにここにやってくる！この場所がスクールアイドル『μ's』の最後のステージとなるのだ！ハハハハハハハ！アハハハハハハハ！」

絵・真・海・凜・希「……」

恐怖に駆られ今にも絶望しそうな表情を浮かべる真姫たち5人、するとこが突然

に「フン！笑わせてくれるじゃない！」

ソ「何？」

絵「にこ？」

に「わかってないわねえ、あんた！魔法使いつてのは諦めが悪いのよ！あんたがどれだけ強力な魔法を使ってみんなを絶望させよしても、必ずこの私が止めて見せるわ！私がみんなを……この世界を守る！」

真「……にこちゃん……」

に「そう！私が……最後の希望』よ」左手に嵌められたウィザードリングを掲げながらにこが叫ぶ

ソ「フツフフフフ……アハハハハハハハ……アツツハハハハハハハハ！何を偉そうに。魔力切れの状態である今のお前にこの私を止めることができるのかな？」

高らかに笑い声をあげながら余裕を見せつけにこに論破するソーサラー……するとどこからか晴人の声が

晴「どんなに最悪な状況でも……ありえないことをやってのけるの

が魔法使いってもんなんだぜ！」

絵「晴人さん！」

に「晴人・・あんた今までどこに？」

晴「すまないにこちゃん・・助けるのが遅れた」

に「べつ、別に助けなんて・・(フラツ)」またふらつくにこ。そしてそれを支える晴人

晴「おっと！でもさっきのにこちゃんの言葉・・ちゃんと俺にも届いたよ！だから・・一緒に戦おう！」

に「晴人・・フン！当たり前じゃない！私を誰だと思ってるの？みんなのスーパーアイドルであり、今では魔法使いのにこにーにこちゃんよ！」

晴「クスツ！そうだったね！じゃあ！」

《ドライブバーオン！プリ〜ズ！》

腰のベルトを起動させ左手に指輪を嵌める晴人。その指輪は以前使っていたものとは違い銀色の輝きを発していた

《♪♪〜シャバドウビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》

《♪♪〜シャバドウビタツチ ヘンシ〜ン♪♪》

晴「変身！」

に「？何その指輪？」

《インフィニティー！》

すると晴人の体から光煌くドラゴンのシルエットが現れ周辺が眩い光に包まれた

《インフィニティー！》

ソ「くっ！」

絵・希・真・凜・海「きゃあああああ！」

《インフィニティー！》

に「何なの？この光？」

《インフィニティー！》

《インフィニティー！》

《プリ〜ズ！》

《ヒースイーフードー♪ ボーザバービュードゴオーン♪》

晴人は自らが生み出した『無限』のエレメント。宝石のように銀色に光輝く『ウィザードインフィニティー』に変身した

ソ「くっ!」

に「晴人・・・その姿は?」

晴「これは・・・俺が生み出した俺だけの魔法・・・俺の最後の希望だ!」

に「最後の希望・・・」

晴「にこちゃん、手を出して」

に「・・・」

晴人はにこの右手に指輪を嵌めその手をそのまま自分のドライブに持つてくる

《プリーズ！プリーズ！》

にこに魔法の光が注ぎ込まれ、魔力が回復していく

に「この感じ・・・魔力が戻った!!ありがとう晴人!これでまた戦えるわ!」

真「にこちゃん・・・また戦うの?」

に「真姫・・・何よ!また戦うなって言いたいの?」

真「止めても・・・にこちゃんはどうせ戦うんでしょ!・・・だから・・・その勝つて!」

に「え?・・・」

真「だって・・・これからもアイドルとして活動していかなきゃいけないんだから・・・μ、sは・・・一人でも欠けちゃ駄目なんだから!だから・・・必ず勝つて!そして帰ってきて・・・私たちのところへ・・・」

絵「真姫の言うとおりにこ!例えあなたが魔法使いとしてこれからも戦う道を選んだとしても・・・あなたはμ、sのメンバー!私たちの友だちなんだからね!」

に「真姫・・・絵里・・・ありがとう!」

真姫と絵里と言葉を交わすといざ決戦の場所へと向かうにこ

ソ「さあ来るがいい!ウィザード!前回のリベンジをさせてもらうぞ!」

晴人「にこちゃん!」

に「わかつてるわ！」

《ドライバーオン！プリ〜ズ！》

《♪♪♪シャバドウビタッチ ヘンシ〜ン♪♪》

《♪♪♪シャバドウビタッチ ヘンシ〜ン♪♪》

に「変身・・・」

ここに続いてソーサラーもドライバーを起動させ

《ドライバーオン！ナウ！》

《♪♪♪シャバドウビタッチ ヘンシ〜ン♪♪》

《♪♪♪シャバドウビタッチ ヘンシ〜ン♪♪》

ソ「変・・・身!!」

《チェンジ！ナウ！》

《フレ〜イム！プリ〜ズ！》

《ヒーヒー ヒーヒーヒー!!》

ここはウィザードフレイムスタイルに、ソーサラーも人間体から魔法使いの姿へと変身した！

ソ「さあ！お楽しみはここからだ！」

に・晴「さあ！シヨータイムよ（だ）！」

BGM♪シヨータイム♪

《コネクト！ナウ！》《コネクト！プリーズ！》

晴「来い！ドラゴン！」

晴人の体から再びドラゴンが姿を現しインフィニティースタイ専用の武器『アックスカリバー』に変化した

ソ・晴・に「はあああああああ！」

各々専用の武器を手にし激しい剣戟を繰り広げていく

シャキイイイイイイイン キイイイイイイン！

ソ「フン!!」

《エクスペロージョン！ナウ！》

に「なんの!!」

《ディフェンド！プリ〜ズ！》

ソーサラーの攻撃魔法をここが防御魔法でガードし晴人がその隙

に攻撃を加える

《インフィニティー！》 高速移動でソーサラーとの距離を詰めるウィザードインフィニティー

晴「フン!!ハアツツ!」

ソ「何!!ぐおお!!」

にこと晴人の連携のとれたコンビネーション攻撃に徐々に追い詰められるソーサラー

ソ「くっ!なかなかやるではないか!ならこれでどうだ!」

《クリエイト!ナウ》

再びファントム達を先の戦いよりも大量に召還するソーサラー

絵「!?ファントムがあんなにたくさん!」

海「いくらあの二人でもさすがにあの数では・・・」

凜「こうなったら凜たちも一緒に・・・ううう・・・」

希「凜ちゃん!うちらもダメー!大きいんやから無理はアカンて!

それに剣さんも・・・」

剣「ううう・ノゾミーヌ・・・すまない」希のそばには戦いのダメー
ジを受け弱っているサードゼクター(剣)がいる

真「にこちゃん・・・」

するとファントムたちの上空をカプトゼクターが飛び交っていた

真「つつ!!あれつてまさか!」

ファントムたちに攻撃を加えたカプトゼクターはそのままある方
向へ飛んで行き

ガシツツ!キュイイイイイイイン!

真「天道!!」

カプトゼクターが飛んで行った先に天道の姿が

天「待たせたな!」

ソ「何!!あれはカプト!!」

ほ「おくい!みんな!」

天道のうしろからほのかがひよっこり顔を出す。それに続いてこ
とりと花陽も姿を見せる。

こ「みんな無事みたい!海未ちゃん!」

花「凜ちやくん！希ちゃんく！」

絵「ほのか！それにことりと花陽も！」

海「ほのか！」

凜「かよちゃん！」

希「よかった！みんな無事で！」

晴人の隣に向かう天道。そして晴人が問いかける

晴「天道・無事だったみたいだな！それにしてもどうして？」

天「ふん・愚問だな！俺を誰だと思っている？」

《回想》

天「プットオン！」

P·U·T·O·N·

吹き飛ばされ落下中のカブトは、ベルトのゼクターホーンを元の位置に戻しマスクドフォームに切り替え装甲を固めることで落下の衝撃に耐えていたのだ。晴人が見た大きな穴はその時のものであった
天（あのあとすぐほのかたちを助け出すまでにそんな時間はかからなかった）

天「フン！ハアアア！」

ほのかたちが襲われる寸前でカブトが駆けつけグールたちを倒していく

こ「天道さん！」

花「た・たすかった・」

ほ「やっぱり来てくれたんだ！仮面ライダー！」

《回想終了》

晴「なるほどねえくさすが総てを司る男だ！やることにそつがない」

天「当然だ！それよりこの『ザコども』は俺が相手しておく！お前達は早くそいつを倒せ！」

に「フン！言ってくれるじゃない！」

晴「言われなくてもそのつもりさ！」

ソ「おのれ・カブト!!」

ドゴオオオオン!!

とそのとき壁に大きな穴が空きそこからガタツクこと加賀美がゼクトルーパー隊を大勢引き連れて現れた

♪BGM FULL FORCE♪

新「天道!!地下から潜入してやつとここまで来れたぜ!」

凜「加賀美さん!!」

ゼ①「加賀美隊長!指示を!」

新「A小隊・B小隊は左右に散って敵を包囲し距離を置いて牽制しろ!残りC・D小隊は俺とカブトに続いて援護射撃」

ゼ「ハッ!」

ガタツクの指揮の元ゼクトルーパーがフォーメーションをとり一斉攻撃を始めた

バババババババン

グギユアアアアアア

新「フン!はあ!うおりやあああああ!」

天「変身!」

H·E·N·|·S·H·I·N·

開戦と同時にカブトに変身する天道!その間にほのかたちはゼクトルに保護され安全な場所まで誘導される。そこから仮面ライダーたちの戦いを見守る8人。

カブトとガタツク、そしてゼクトルーパーたちの善戦によりファントム・グール集団が一掃されていく。

シャキンキイイイイイン

天「ハアアアアアアア!」

そしてにこと晴人たち魔法使い同士の戦いは佳境を迎えようとしていた。

に・晴「ハアアア!!」

ソ「ぐおおおお!」

にこと晴人の剣による同時攻撃が炸裂、ソーサラーは大ダメージを喰らい膝をつく

ソ「こうなれば、不完全と言えど今まで貯めてきた魔力を利用してくれるわ!」

ハルバートを掲げ『タナトスの器』が集めてきた魔力エネルギーを
吸収、自らの身体に取り込んだ

晴「何!!」

ソ「これでジ・エンドだ!」

《イエス! ファイナルストラックイク! アンダースタンド?》

晴「にこちゃん、この指輪を」

に「この指輪は?」

晴「今のにこちゃんならこの指輪を使えるはずだ!」

に「わかったわ! じゃあ一緒に?」

晴「ああ」

に・晴「ファイナーレよ・だ!」

《♪♪チヨイイネ フィニツシユストライク! サイコ♪♪》

晴人と同じフィニツシユウイザードリングを指に嵌め必殺技を発
動するにこ。ふたりの頭上にドラゴンのオーラが現れた

ほ「見てにこちゃんの姿が!」

絵「あれは?」

真「ドラゴン!!」

にこと晴人にドラゴンの力が宿り腕には爪、背中には羽根が、そし
て腰に尻尾、オールドドラゴン、インフィニティードラゴンの形態に変
化した

に・晴「とおお!」

ソ「フン!」

両者共互いに上空に飛び上がり空中で高速回転しながら

ソ「うおおおおお!」

に・晴「はああああああ!」

にこと晴人の右足にはドラゴスカルが顕現されそのまま飛び蹴り
を繰り返す

三人のライダーキックが炸裂、互いの力がぶつかり合い激しい光と
ともに火花が散る。

μs「きやああああ!」

ゼ「うわああああああ!」

に・晴「……」

ソ「フハハ、どうやら二人掛りでもこの『タナトスの器』の力の前では無力か？フウウン！」

ソーサラーの力のほうが二人よりも強大の為徐々に押され形勢が悪くなる

晴「くう……」

に「まだまだよ……つぐぬぬ……」

こ「にこちゃんたちが押されてく」

海「このままでは……」

真「にこちゃん……」

天「二人でだめなら三人ならどうだ？」

μ⊠s「え？」

にこと晴人の劣勢状態に不安がる真姫たち、そこにすかさず天道が入ってくる

♪BGM ライダーキック♪

天「ハイパーキャストオフ!!」

H·Y·P·E·R·C·A·S·T·O·F·F·

C·H·A·N·G·E·H·Y·P·E·R·B·E·E·T·L·E·

カブトの頭上に時空の歪が生じそこからハイパーゼクターが現れそのままベルトのサイドバックルに取り付けハイパーキャストオフする。

ほ「すごい！カブトの姿がまた変わった！」

希「ハイパーカブト??」

晴（あの力？もしかして……）

M·A·X·I·M·U·M·R·I·D·E·R·P·O·W·E·R·

《ONE TWO THREE》 ガチャン

天「ハイパーキック！」

R·I·D·E·R·K·I·C·K·

天「ハッ！」

必殺技を発動するカブト。全身のカブテクターが展開、上空へとジャンプし、にこと晴人の頭上を潜り抜けソーサラーにむけてライ

絵「ちゃんと無事に帰って来れたわね！」

ほ「いや〜やっぱりにこちゃんはすごいよねえ〜」

希「宇宙No.1アイドルは伊達じゃないやんねえ〜」

に「絵里・・希・・」

μ☒s「ふふふふ」

勝利したにこを改めて祝福し迎え入れる真姫たちμ☒sのメンバー。その様子を見て安堵する天道と加賀美

新「どうやら事件は無事解決したみたいだな、天道！」

天「加賀美か・・お前最近出番が少ないな！」

新「っ!!余計なお世話だ！」

晴「ハハハハ。こっちもこっちで仲がいいねえ〜♪♪・・それにしても・・さっきのあの力・・」

(回想)

天「ハイパーキャストオフ!!」

H·Y·P·E·R·C·A·S·T·O·F·F·

C·H·A·N·G·E·H·Y·P·E·R·B·E·E·T·L·E·

(回想終了)

ハイパーカブトへパワーアップした時のことを思い出しながら天道を見つめる晴人

晴「・・・・」

そして・・数日後

に「みんな〜今日はにこのために来てくれてありがとう〜♪♪みんなの応援のおかげで今日もスーパーアイドルにこに〜にこちゃんのとびつきりのスマイル〜みんなに届けちゃうよ♪♪」

絵「つてにこ〜歌う前にステージ独占するような真似しないの!恥ずかしいじゃないの!」

真「そうよ!これじゃまるでにこちゃんのワンマンステージみたいじゃない!」

観客 あっははははははは

ライブ当日。今日もたくさん観客がμ☒sのライブに見に会場に集まっている。

晴「ひやく流石注目のスクールアイドルグループ「μ's」。こんなにたくさんの人たちが集まって来るんだね」

天「μ'sは今となつてはスクールアイドルの中でも人気急上昇中のグループだからな！これぐらい当然だろう」

晴「なるほど！こりや圧倒されるわ」

ビルの屋上でライブの様子を伺う天道と晴人。これから晴人はもとの世界へ帰ろうとしているのだった。

天「ライブ・見てかなくていいのか？」

晴「ああ！もともと俺はこの世界の住じゃないし、それに最高のショータイムを見せてもらったからねえ」

天「ショータイムか。お前も、まったく持って面白い奴だ！操真晴人！」

晴「そうかい？それじゃあ、帰るわ！また何かあつたらこつちの世界に遊びに来るよ」

天「そのときは家に遊びに来い！美味しい飯でも食わせてやる！」

晴「くすつつ」

《トラベル！プリクズ！》

『謎の男』からもらったウィザードリングで光の道を作り出す晴人

晴「あつ、そういえば・天道。あんたに一つ言っておきたいことがある」

天「？」

晴「あんたの持つハイパーゼクター・あれはきつと次元を超える力を持つてるんだろ？今回、俺とあんたたちの世界が繋がってしまった原因はおそらくそのハイパーゼクターの時空を越える力によるものだと思う」

天「何？」

晴「きつとその『次元を超える力』そのものが何らかの原因で他の世界同士を繋げてしまったんだと思う！もし今後もハイパーゼクターを使えばこれからもっと危険なことが起こるかもしれない」

天「危険な事？それはいったい？」

晴「それは俺にもわからない・だからあんたもこれから『力』の

使い方には注意してほしい・・・長く話しすぎたね！じゃあいつかまた会おう」

天「・・・」

晴人の言葉に言葉を失う天道

天（まさか・・・『あの事』が関係して・・・いやそんな馬鹿な・・・）

天道の頭の中で、廃墟の中を助けを求めながら泣き叫ぶ赤髪の少女の姿が思い浮かぶ。そして天道の表情が曇る

天（・・・）

観客 わああああああああ

観客が歓声の声を上げる。いよいよライブが始まりμsの新曲が流れ始める

に「それでは聞いてください」

μs Life is SHOWTIME

そう言いながらにこは左手に輝くウィザードリングを天高く掲

げ・・・

♪♪マ○か!? ♪♪マ○で!? ♪♪マ○だ!?

♪♪シヨ○～いむ♪♪

♪ Life is SHOWTIME ♪♪

ウィザード編fin

to be continue

デデーン

♪BGM NEXT LEVEL♪

ナレーション「仮面ライダーカブト!!」

に「お～い！早く！早く！」

真「なんであんたがここにいるのよ！」

ほ「μs！上陸!!!」

こ「いつかことりもそうなれたらいいな・・・」

絵「合宿よおおおおお！」

ナレーション「天の道を往き総てを司る!!」

SS #1 「お兄ちゃんと呼びたくて・・・」

「お兄ちゃんと呼びたくて」

ナレーション「ここは東京タワーにほど近い洋食店『Bistro la Salleービストロラサル』。仮面ライダーカブトこと天道総司がスクールアイドルグループ『μ's』のメンバー達と出会い、東京タワーでのライブを終えてから一週間ほど過ぎたある日」

真「ご馳走様。うーん、流石あなたがお褒めするっただけあるわね」

天「ああ、この店のランチはまあまあ行ける。今度ほのかたちも呼んでこの店の売り上げに貢献してやってくれ！」

真「相変わらず一言余計ねあなた！フフン、まあいいわ！考えておいてあげる」

天「ああ、頼むぞ」

今日は天道が真姫に自分の行きつけの店である『サル』の味をを紹介するためにつれてきたのである。

真（最初天道に合ったときは、なんだこいつは？って感じだったけど、今となっては・・・その・・・なんて言えばいいんだろう？・・・頼りになる・・・お、お兄ちゃん的な感じかしら／／フフフ・・・何言ってるんだろう？私ったら）

東京タワーライブ以降、真姫の中では、天道がただの家での料理人としてだけでなく信頼できる兄のような存在になりつつあった。

真「そういえば天道って『ZECT』で組織の、その・・・トップなんですよ？」

天「そうだが、急にどうした？」

真「いや別に。ただトップってことはどのくらい偉いのかなって気になっちゃって」

天「そういうことか。うん、そうだな・・・例えばワーム騒動で中止になりかけたμ'sの東京タワーライブを予定通り公演できるように仕向けるくらいは容易いことだな！」

真「あれってあなたの仕業だったの？」

天「その通りだ！」

真「戦いで壊されたステージを修理したのも？」

天「それも俺が部下達に命じたことだ。あの時は使える人間を総動員して壊れた会場をもと通り直したり、ライブができるように偉い人たちと交渉して許可を得るまでに丸一日も掛からなかったな」

真「ああ・・そ、それは・・あの・天道あの時は本当にありがとう。あらためてお礼を言うわ。でもどうしてそこまでして」

天「以前樹花が『*μ's*が東京タワーでライブするところを見てみたい』って言うていたからな」

真「樹花ちゃん？」

天「ああ！健気な妹の切なる願いを叶えるのは兄としては当然だからな♪」

真「へえ、そうなんだ（私たちの為：4じゃなくて、樹花ちゃんの為だったんだ・・）」

ジト目で天道を見る真姫

真（天道つて、樹花ちゃんのこと溺愛しすぎよね？ここまで来るともはやシス*k*・いやロリ*k*・いやいや・）

天「弓子さん、コーヒーおかわりだ！」

真（でもまあ天道のおかげで今回のライブが大成功したってことに変わりはないわけだし・まあいいかな）

そのとき加賀美が店に入ってくる

新「おお天道！来てたのか？おや真姫ちゃんまで？」

天「なんだ？加賀美か？」

真「失礼でしょ！加賀美さんこんにちは」

新「こんにちは。ここの料理はお気に召してくれたかい？」

真「ええ！東京タワーの傍にこんな美味しいお店があるなんて知らなかったわ。今度花陽たちも連れて来るわ」

新「それはよかった！是非頼むよ！」

ピピピピピッピピピ

そのとき天道の携帯に着信が入る

天「もしもし・あつ、ちよつと待ってろ」

電話をとるなり店の外に出る天道、加賀美は何かを察したようので、
敢えて気にしないような素振りをした

真「?あれ?天道・ねえ加賀美さん、天道って」

新「ああ、たぶん・まあ真姫ちゃんが思ってるようなことじゃないから安心して」

真「そうなの? って別に私は心配とかしてないから」

新「ははは、そうか。ごめんごめん」

真「・あの・その・加賀美さん」

新「??」

真「今のとは関係ない話なんだけど・私が・天道のこと・その『お兄ちゃん』って読んだら変かしら?」

新「え?真姫ちゃん?どうしたの急に?」

真「なんていうか私って一人っ子だから、兄妹がどんな感じなのか
なって思ってた。いつもほのかや絵里を見てると少しだけ羨ましい
なっているのがあったから・」

新「ははくん、一人っ子故の悩みってわけねえ。でも・いやきつ
と大丈夫だよ!むしろ天道もまた一人妹ができたと思ってる喜んでく
れると思うよ」

真「??またってどういうこと?」

新「え?あつ、いや何でもない何でもない!とつ、とりあえず天道
が電話から戻ってきたら一度『お兄ちゃん』ってよんでみたら?」

真「え?でもそんな急にそんなことして大丈夫かしら?」

新「問題ないよ!なんせあいつのシスコン属性は常軌を逸してるか
らなあゝこの前も樹花ちゃんに好きな人できたって勘違いして勝手
に取り乱してたくらいだからなあゝ」

真「あの天道が取り乱す??そんな馬鹿なこと・」

新「あつ、今話したこと天道には内緒で」

真「ふふふ、わかったわ!安心して」

すると天道が店に戻ってくる

天「すまない、待たせたな。ところで真姫お前そろそろ練習の時間
だろ?学校まで送ってやるぞ」

真「あ、ありがとう。あとその天道？」

天「何だ？」

真「ええと・・・その・・・」

天「なんだ？言いたいことがあるならばつきりしろ」

真姫は加賀美に目を向ける。加賀美は真姫に対し（大丈夫）とサムズアップで合図をする

真「ええと、お、お、」

天「？」

真「・・・お兄ちゃん／／／」

天「!!」

新（おおっ!!天道のこの反応やはり喜んだ・・・）

ブウウウウウウウ

ガシツ 天道は飛んできた《カブトゼクター》力強く手に掴む！

天「お前真姫に擬態したワームだな！・・・変s・・・」

真・新「ヴェエエエ!!」

新「わわわわw・・・お・落ち着け天道」

天道を静止する加賀美

天「離せ加賀美!!こいつはワームだ！本物の真姫が俺の事『お兄ちゃん』と呼ぶなんてあり得ない!!」

真（ガーーーーーン!!）

天道の一言でポツキリ心を折られた真姫・・・

新「真姫ちゃん!!ここは俺に任せて早く練習に・・・」

真「え、ええ・・・お願い・・・」

おぼつかない足取りで店を出る真姫

音ノ木坂学院屋上

絵「もうすぐ練習始めるけど」

に「真姫何かあったの？」

花「さつきからずっと隅でふてくされてるね」

ほ「おーい！真姫ちゃん！練習始めるよー！」

シクシク・シクシク・

真「どうせ、私なんて・私なんて・シクシク」

真姫はシヨツクのあまり数日寝込んでしまった・

哀れスター西木野真姫・

t o b e c o n t i n u e

SS #2 「天道の憂鬱・・・」

ナレーション「ここは東京タワーにほど近い豪華な一軒家。仮面ライダーカブトこと天道総司はここで妹である樹花と二人暮らし。そんな樹花は音ノ木坂学院スクールアイドルグループ『μ's』のファンである所謂『ラブライバー』の一人である。そして天道は毎朝、朝食の準備を済ませるとソファに座り新聞を読みながらコーヒーを啜るのが日課となっている」

天「ううん？、先日の『μ's』東京タワーライブ大成功。次のライブが早くも決定！・・・そうか。相変わらず凄い人気だな！スクールアイドルグループと言うものは。しかし何がそんなにいいんだか？」
とそのとき

ダツダツダツダツ
ダツダツダツダツ

樹花が階段を駆け下りる音

樹「お兄ちゃん!!おはよう!!」キメポーズ取りながら

天「おはよう。今日もいい天気だな！」

樹「うん!あつ?その新聞『μ's』載ってるじゃん!!」

天「ああそうだな。今でもすっかり人気」だもんなスクールアイドルと言うものは」

樹「いいなあ〜ああ、いつか私もスクールアイドルになりたいなあ〜」

天「樹花がスクールアイドルかあ。なら俺はマネージャーにでもなってみようかな?」

樹「それいい!!すごいい!!是非お願いします!!」

天「ハハハ、まあ冗談はこのくらいにして、さあ早く食べないと学校に遅刻するぞ!」

樹「はーい!いっただきまーす!あつ、そうだ!お兄ちゃん!見て見て!」

天「ん?」コーヒーを口に含みながら樹花の方に振り向く

樹「・・・につこにつこにー！あなたのハートににこにこにー！笑顔届ける矢澤にこにこー！にこにーって覚えてLOVEニコー!!」

天「ブフオオオオオオオオオオオ!!」

口「含んだコーヒーを盛大に吹出す天道・・・」

樹「えっ!!お、お兄ちゃん、大丈夫??」

天「ゴホツ　ゴホツツ　ゴホツ!・・・」激しく咽る天道

樹「どうしよう・・・きゅ、救急車を・・・」

天「じゅ、樹花!!だ、大丈夫だ！ちよ、ちよつとな・・・樹花・・・、とりあえずその挨拶はあまり人前でするものじゃないぞ！なんていうか流石に恥ずかしいからな！」

樹「ええええええ！これ結構気に入ってるのに・・・でもお兄ちゃんが言うんなら仕方ないか」がっかりする樹花

天「わ、わかつてくれたらそれでいいんだ！さあ早く食べないと本当に遅刻するぞ！」落ち着きを取り戻しながら・・・

樹「はくい！では改めましていっただっきまうす！」

天（・・・なんとということだ・・・あの樹花が『にこ』推しだったなんて・・・せめて知的な絵里や海未だろ?・・・）

樹「うくん！お兄ちゃん！今日の朝ご飯もグー!!」

天「そ・・・そうか？そうだろ！ハハハハ・・・」

t o b e c o n t i n u e

SS #3 「賢い カワイイ ○○○」

ナレーション「ここは東京タワーにほど近い洋食店『Bistro la Salle ―ビストロ ラ サル』。天道総司はこの店の常連である。そして加賀美はこの店のアルバイトであったが、辞めてからも度々天道と共に店に来ては他愛もない話をするのが日課である・・」

♪ 僕は今の中で ♪

新「いや／＼やっぱりすごいなああの子達、流石今をときめくスクールアイドル『μ's』だなあ／＼この前のライブも大盛況だったもんなあ」

天「そうだな・・」

先日の東京タワーライブの映像をテレビで見ている天道と加賀美。関心を示す加賀美に対し天道は相変わらずのクールぶりである。

新「なんだよ！天道、素っ気無いなあ／＼お前一応メンバーのスター西木野真姫ん家の料理人だろうよ！応援とかしないのかよ？」

天「それとこれとは関係ない！大体なんだスター西木野って？」

新「なんでもない！あつ、でも確か樹花ちゃんは世界の矢澤にこ推しだろ？」

天「その話はやめろ！！それになんだ、スター西木野の次は世界の矢澤？さつきからそのキャッチフレーズはなんだ？意味がわからん」

楽曲が終わりMCに移行する

ほ「皆さんこんにちわ！せーの」

μ's「ミュージズです！」

ほ「今日はこの東京タワーステージでのライブ来て頂いて本当にありがとうございます！それではさっそく自己紹介から参りましょう」

花「アアアア アアア ダレカタスケター！」

観客 チョットマツテター！

凜「凜ちゃんと言えばー？」

観客 イエローダヨー！

真「真姫ちゃんプリティー」

観客 パピペポ

海「みんなのハート打ち抜くぞ！ラブアローシュート」

観客 ウウツツ・・・

ほ・観客「せーの、ファイトだよっつ!!うん、ファイトだよー」

こ「ここのりのおやつにしちやうぞ〜」

に・観客「・・・につこにつこにー！あなたのハートにににににー！笑顔届ける矢澤にににこー！ににににー！って覚えてLOVEニコー!!」

希「のぞみパワー た〜ぷり注入！は〜い！プシュツツ！」

観客 イタダキマシタアアアアアアアアアアアー!!

天「加賀美、さつきからやってるこれはなんだ？」

新「お前つてやつは〜MCでのアイドルと観客との合言葉だよ！いやいいよなあ〜まさになんか一体になってできるワザだよー」

天「まさか、お前もアイドルのライブでそういうことしてるのか？」

ジト目

新「ば、バカなこと言うなよ！俺はこれでも『戦いの神 ガタツク』だぞ！一人の戦士としてそんなアイドルの追っかけなんて・・・」

絵「賢い カワイイ ???」

新「エリイチカアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」画面に向かって大声で叫ぶ加賀美。その手にはどこかから取り出した水色のサイリウムが握られていた

天「!!!」

新「ハッ!!ハハハ・・・」

絵「ハラシヨオオオオ!!」

絶句し冷たい眼差しで加賀美を見つめる天道

天「加賀美・・・お前・・・」

新「え?あ〜いや、こ、これはだな・・・オホン・・・」

天「なんということだ・・・加賀美が絵里推し・・・俺は頭が痛い・・・」

t o b e c o n t i n u e

SS #4 「Ring a yellow THEB
EE」

ナレーション「地獄兄弟：キックホップ矢車想、パンチホップ影山瞬。かつて『ZECT』メンバーであり精鋭部隊『シャドウ』のリーダーとして栄光を手にしていた二人だったがとある事件でその地位を剥奪され今となってはすっかり廃れてしまった。しかも自分達を『闇の住人』と名乗り放浪しながらあちらこちらで喧嘩を売っては暴れまわるといふ．．．はたまた迷惑なコンビである」

※影山はTVシリーズ48話でワーム『ネイティブ』化し矢車によつて倒された死亡した．．．が天道のハイパーゼクターの力で時を巻き戻しネイティブ化する前に助けられた経緯を持つ（あくまでもこの作品のみの設定ですbyフミヤノ）

そんなたちの悪い『地獄兄弟』の二人がここ音ノ木坂に姿を現し住み着き始めしばらくたったある日のこと．．．

凜「ハツ ハツ かよ〜ちゃん、ゴールまであと一息だよ〜頑張るにや〜 ハツ ハツ」

花「ハア、ハア ウウ、待ってよ凜ちゃん〜私もう限界 ハアハア」

凜「そんなこと言ってるけど、みんなもう先に行っちゃってるよ！遅れて残ってるの凜とかよ〜ちゃんだけなんだからねえ〜」

花「わ、わかってるよ〜（どうしょ〜また太っちゃったのかな〜体が重いよ〜ハアハア）」

河川敷でランニング中の凜と花陽。どうやら二人だけ遅れて取り残されているようだ

花「ハアハア もう．．ダメ．．限界．．」

ふらつきながら今にも倒れそうな花陽。すると何かに躓いてドンツ

花「キヤツ!!」

凜「かよ〜ちゃん!!大丈夫?」

花「あ、うん・・なんとか ハアハア ごめんね凜ちゃん」
?。「ああん?なんだ」

花陽が躓いたのなんと男の足だった。しかもその足の主は
矢「なんだ?おまえら?」

花「ご、ごめんなさい私ワザとじゃ・・」
すると凜と花陽の後ろから影山が

影「兄貴!こいつらスクールアイドルの」

凜「ひゃああ、どこから?」

矢「ふん・・スクールアイドルも・・最高の地獄だ!」

空を見上げながら矢車が眩く

花「えっ?地獄?」

凜「うくん?よくわかんないけど・・とりあえずこの人たちおかし
いにやゝハハハ ウケル」

矢・影「ああん?」

矢車と影山の目が一気にぎらついた!

矢「おい・・今・・俺の事笑ったか?」

凜「え?そうだけど ハハハって」

花「凜ちゃんっつ!!」

影「お前・・よくも!!」

矢「お前達はいいいやなくどうせ俺なんか・・ふん」

花「凜ちゃん・・この人達危ないよ早く逃げよ!」

影「ここは通さないよ」

矢「どうした?・・笑え・・笑えよ」

キュイイイン キュイイイン ピョンピョンピョン

二人のもとに『ホッパージェクター』2体が飛び跳ねながら向かって
くる。二人は『ホッパージェクター』を手に取り

花「あ、あれは?」

矢・影「変身!!」

矢車はゼクターを左側に、影山は反対の右側に向けてベルトに装填
する。

《《HEN—SHIN》》

《CHANGE KICK HOPPER》

《CHANGE PUNCH HOPPER》

花「あれは・・天道さんと加賀美さんと同じ」

凜「仮面・・ライダー・・」

影「兄貴、こんな奴らさつさとやつちやおう！」

矢「お前らも、俺達と共に・・地獄に墜ちるか？」

花「えええっ!!ちよ、凜ちゃん天道さんたち呼んで・・って」

花陽の前に腕を差し出して自らを盾にする凜

凜「下がって!かよちゃんは・・凜が守ってみせるにや!」

ガチャ

すると左腕に『何か』を取り付ける凜

矢・影「!!」

影「そのブレスレットはまさか」

天に向かって腕を掲げながら凜が叫んだ

凜「さあ!凜のもとに飛んでくるにや!『ザビーゼクター』」

ブウウウン ブウウウウン

すると空に時空の裂け目『ジョウント』が現われそこから蜂型のゼ

クターが飛んできて凜の手の平に収まった。ゼクターをキヤツチし

た凜が左手のブレスレットにそれを取りつけて叫んだ!

凜「変身!!」

ギューーン ガチャ

《HENSHIN》

凜の体を銀色の鎧が覆い戦士の姿へと変えた

凜「おおつつつ!これが・・凜の変身した姿かにや」

変身した自身の体に触れ感激する凜、すると突然キックホッパーの

キックが飛んできた

矢「シューツツ!!」ガキーン

凜「フン!!」持ち前の反射神経で攻撃をガードする凜

影「お前なんか『ザビー』に変身なんて!!うりやああ」

パンチホッパーも続けてパンチを見舞う

凜「この程度の攻撃、なんともないにや♪♪」

パンチホッパーの攻撃も同時にガードする凜、その動きはもはや戦闘のプロレベル!!

花「あの凜ちゃんが・・・ヘンシンシチャッタノオー!」

凜「うくにやつつ!」二人の攻撃をガードし、そのまま弾き飛ばし距離を開く

矢「くっ!!」

影「兄貴!!」

すると凜はゼクターの羽を展開、そして本体を反転させる。すると装甲全体に電気エネルギーが走り徐々に上半身のアーマーが腕から胴体、頭部へと順番にせりあがる。そして・・・

凜「よし!ええと、たしか・・・『キャスト オフ』」

《《CAST OFF》》

チユドーン バン

アーマーが一気に弾け飛びキック・パンチホッパーに向けて射出された

矢・影「ぐっ!!」

《《CHANGE WASP》》

花「り、凜ちゃん!!その姿は?」

凜「これが真の姿『仮面ライダーザビー』だにやー!!にやんにやんにやく♪♪」

影「このくその姿でふざけたことを言いやがって!!」

矢「相棒・・・ここは俺一人で・・・」

影「兄貴?・・・ああ、頼むぜ!」

凜「にやにやにや?さあ掛かってくるにやく」ファイティングポーズで威嚇する凜

矢「フツ フツ フン ハッ! シュツ!!」

凜「にや にや にや にやつ!」

互いにキックとパンチを繰り返しながら交戦し続ける凜と矢車矢「チッ!」

キックホッパーはバックルの尻部を持ち上げ

《《RIDER JUMP》》

勢いよく頭上へジャンプし持ち上げた尻部を再びもとの位置にセツトし

矢「ライダーキック!!」

《《RIDER KICK》》

キックホッパーから必殺のライダーキックが凧の頭上へと迫る

花「あああああ!凧ちゃああああん!」

凧「クロックアップ!!」

《《CLOCK UP》》

矢「何?」

凧の姿が急に消え、ライダーキックをかわされた矢車

《《CLOCK OVER》》

凧「にゃ!!」

クロックアップで攻撃をかわした凧がキックホッパーの背後を取った。そして・・・

凧「とおおおお!」

側転・前転・バク宙を繰り返して高くジャンプする凧（お前ホントに高校生か?）

凧「とどめにゃ!ライダーステイング!」

《《RIDER STING》》

ゼクターの尻部ボタンを押し必殺技を発動する凧ザビー

凧「ハッ!!」

矢「ハッ!!しまt・・・」

ライダーステイングが炸裂しキックホッパーにもろ直撃し

ズキユウウウウン バアアアアアン

矢「ダレカタスケター!!」キラーン

変身が強制解除され空の彼方へと吹き飛ぶ矢車

影「兄貴ー!!チョットマッテター!!」

飛ばされた矢車を追いかける影山

花「え?それ私の台詞!!トラナイデー!!」

凧「ふうくまあこんなもんかによく」

変身を解除する凧、そこへ駆け寄る花陽

花「ちよつと凜ちゃん、大丈夫なの？」

凜「かよちん！凜は全然平気だよ！かよちんこそ怪我なくてよかったです」

花「私はいいいけど、ところで凜ちゃん、その腕につけてるやつは？」

凜「あ、これ？これはねえ・・・」

・・・回想・・・

凜「え？これを凜に？」

天「ああ、それはザビーの変身ブレスだ。それがあれば俺達と同じライダー『ザビー』に変身できる」

凜「いいの？これを凜がもらって・・・」

天「しばらくは、sの様子を見てきたが、凜ほど優れた身体能力があればこいつを託せる。ザビーゼクターもしばらく資格者が現われず退屈しているだろうし、なによりワームの変わりに面倒な奴らがこの街にうろつき始めているしな。万が一の護身用として凜に預けておく。だからってむやみに使うんじゃないぞ！ザビーゼクターは結構きまぐれな女王様タイプのゼクターだからな」

凜「へえくなんだか真姫ちゃんみたいだよ」

真「どういう意味よ!!」

・・・回想終了・・・

凜「ということでしたばらく凜が仮面ライダーザビーに変身することになったんだにやー」

花「へ、へえくなんかすごいねえ・・・ハラショー」

凜「うん！これからもずっと凜がかよちんを守ってあげるからね」
♪♪

花（大丈夫なのかな？こんなノリで仮面ライダーに変身しちゃって・・・？）

そのころ・・・

影「兄貴・・・だいじょうぶ？」

矢「・・・笑え・・・笑えよ・・・フフフ」

バケツに頭から突っ込んで動けないでいる矢車・・・その姿を見て嘆き悲しむ影山

哀れ・・・地獄兄弟のふたり・・・

その様子を遠くから見つめる天道

天（察するにザビーに変身した凜にやられたか？フッフ、あいつもなかなかやるな！どうやらザビーゼクターも新しい資格者が現われてご機嫌のようだな）

天道が空を見上げると頭上にザビーゼクターが、そしてその傍らにトンボ型のゼクターも割り込んできて・・・

t o b e c o n t i n u e

SS #5 「蒼の銃弾く園田海未は未来の風く」

ナレーション「園田海未・・・実家が日舞の家元で二年生のほのかとことりとは幼馴染である。またμsの作詞担当と生徒会副会長も務め弓道部でエースでもある。勉強においても成績は優秀な方であらゆる面で万能に見える彼女だが・・・」

キーンコーン カーンコーン

下校途中の海未・・・

海「弓道部も大会が近いので最近練習がハードになってきましたねえ。それにμsも次の曲の為の作詞作りもしないといけないから、しばらくはゆつくり休めそうにありませんし。はあ・・・」

ガラスに映った自分の顔を見つめる海未

海「あくああ、最近顔から疲れが滲みでてきてる・・・いけませんねえ、これじゃスクールアイドルとしてとても不味いです。こんな顔お客さんに見せたらなんとと思われるでしょうか・・・」

??「それでは私のメイクであなたを輝かせるっていうのはどうでしょうか?」

海「ええ? な、なんですかあなたは?」

大「これは大変失礼しました。私は花から花へと渡る風、メイクアップアーティストの『風間大介』と申します。失礼ですがあなたはスクールアイドルグループμsの園田海未さんとお見受けしますか」

海「ええ、そうですが、きやああああ!」

海未の顔を見るなり、その長くて美しい髪にそっと手を触れる大介。

大「動かないで。」

海「そんな急に言われても、って今度は何を?」

ギターケースの蓋を開けメイク道具を取り出し

大「風間流奥義・アルティメット・・・メイクアップ!」

♪♪♪BGM♪♪

海「な、何ですのこれ?」

大介の周りに変なオーラーが現われ、辺り一面花の幻影が見え始めその光景にうつとりし始める海未

海「こ・これは・・・」そして

大「メイクアップ!」

最後のメとして香水を吹きつけ手鏡を海未に渡す大介

海「こ・これが私?・・・わあ／＼」

鏡に写った今まで自分でも見たことがない美しさにうつとりする

海未

風「喜んでいただけでよかったです。あなたは正にひとつの・・・ひとつの・・・えつと・・・その」

?? 「女神!!」

風「そうそう、それそれ!」

海「え?この子は?」

ゴ「私は百合子!こう見えても大介の助手なんだから」

海「こう見えてってどう見ても小学生?」

大「ゴン!勝手にベラベラしゃべるんじゃない!」

海「え?ゴン?」

ゴ「もう大介つてば、その呼び方やめてって言ってるでしょう!私だって名無のゴンべいは卒業なんだから!」

海「ああ・・・どうやらあだ名のようにすねえ」

風「どうもうちのゴンが余計なことを話して申し訳ないです。ところで海未さん。実はあなたに折り入ってお願いが・・・」

女「風間大介・・・」

海未たち三人の前に怪しい黒装束の女達三人が立っていた。

大「お、お前達は・・・」

海「え?今度は何ですか?」

すると女達はワームサナギ態に変貌した

海「ええっ!ワーム?」

大「海未さん下がって!クツ!」ガシツ!

ゴ「きやあああああ!」

大「ゴンっ!クツ」

ワームの別の集団が背後から大介とゴンを羽交い絞めにして捕らえた。その反動で大介の懐からなにかが飛びだし、海未の足元に転がる

海「こ、これは？」

大「海未さん逃げて!!」

女「間宮麗奈の敵討ちをさせてもらうぞ！」

大「何？」

ゴ「ダイスケエエエ！」

海「これは大変ですね！天道さんと加賀美さんを・・・」

シャアアアアア

ワームに囲まれた海未。連絡しようにも電波が遮断されて天道達の助けも呼べず絶対絶命の危機である

海「こ、このままでは・・・」

ブウウウウウウン

すると謎のトンボ型のゼクターが電子音を鳴らしながら飛んできた

海「ト、トンボ？」

大「海未さん！グリップの引き金を引いてください！変身するんです！」

海「ええっ、へ、変身？グリップってこれですか？」

キュイイイイイイン ブウウウウウウン

足元に落ちたグリップを拾いそのまま引き金を引く海未。するとトンボ型の『ドレイクゼクター』がグリップと合体し銃の形になった。

ギューーーン ガチャ

《《HEN—SHIN》》

海「はっ、しまった！これはもしかして天道さんと同じ・・・」

気づいたときにはもう遅く海未の体は銀色の鎧が覆われ戦士の姿へと変えた

海「ぬあああああ！（変顔をしながら叫ぶ海未）これが・・・私が変身した姿？」

変身した自身の体に触れ驚愕する海未、すると突然ワームが攻撃をしかけに変身した海未のもとに飛んできた

海「キヤアアア！来ないでください！」思わずトリガーを引きワームに銃弾を浴びせる

バンバンバンバン バンバンバン

シヤアアアアアア グッルルルル

海「こ、これは。行けそうですね」

女「くっ！こんな学生ごときに手間取るとは」

大「海未さん！そういうの尻尾を引いてライダーフォームになるのです」

海「ひよつとしてあれですか（ゼクターの尾を引いて）キヤ、キヤストオフ！」

《CAST OFF》

チュドーン バン

アーマーが一気に弾け飛びワームに向けて射出された。ダメージを食らった何体かのサナギワームは爆発をし、それによって拘束から解放された大介とゴン

大「海未さん、やはりあなたは・・・」

《CHANGE DRAGONFLY》

―仮面ライダードレイク―

♪♪♪BGM 私たちは未来の花♪♪

海「これが私の変身した仮面ライダー・・・」

ガラス越しに写った自分の姿を見て関心を示す海未

女「ぐぬぬおのれ！」

女の変身したサナギワームが脱皮し成体ワーム『サブスト』

海「脱皮した？しかしここで引き下がるわけには行きませんね！」

クロックアップするサブストワーム。それに合わせて海未も

海「これは？では私もクロックアップ」

《CLOCK UP》

ナレーション「クロックアップしたライダーフォームは通常を遥かに超えたスピードで活動することができるのだ」

クロックアップの世界で激しい戦闘を繰り広げる両者。サブストワームの接近攻撃を銃撃で牽制する海未。そして

《《CLOCK OVER》》

それを見ていた大介

大「海未さんそろそろ必殺技を！」

海「こうですね！」

マスク内側のモニターからマニュアルが目の前に掲載され、ドレイクゼクターの羽根を合せ折りたたみシューティングモードに切り替え再び尻のトリガーを引き

《《RIDER SHOOTING》》

海「これが、必殺技？ではライダーs・・・いえここは」

グルルル シャアアアア

海未に向かって突進してくるサブストワーム。エネルギーをチャージし引き金を引きながら海未は叫んだ

海「あなたの悪事打ち抜きます！ラブアローシューーーー！ト！」
バーン

ギユアアアアアア ドガアアアアアアアアアア

海未ドレイクの放った『ライダーシューティング』もとい『ラブアローシュート』を食らったサブストワームは爆発四散する

大「ふうくやりましたね海未さん・・・」

海「はい！これで一件落着ですn・・・」

シャアアアアアア

すると背後から生き残ったワームが海未を襲いかけてきて

天「フンツ！はあ！」

♪♪♪BGM ライダーキック♪♪

海「天道さん！」

ワームの一撃を止めカウンターパンチを食らわせるカブトの姿が

《《ONE TWO THREE》》ガチャン

天「・・・ライダー・・・キック！」

《《RIDER KICK》》

向かってくるワームに必殺のライダーキックを炸裂させる。

ワームは大爆発し、変身を解除する天道。海未もそれにあわせて変身解除をする

海「天道さん・・・あのこれは・・・」

大「また邪魔しに来たのですか？相変わらず気に食わない人ですね。天道総司」

天「お前こそ、久々に姿を見せたと思えばスクールアイドルをナンパか？」

海「え？お知り合いですか？」

大「ええ、まあ。それより海未さん！さっきの戦いは見事でした。やはりドレイクの後継者はあなたにお願いします！」

天「何？」

海「ええええ！どうして私が？」

ゴ「いやあそれがねえ、大介が今度外国で有名な美人アーティストの下で付き人兼メイクの仕事することになっちゃって。それでドレイクの後継者を探しにこの音ノ木に来てたのよ！もちろん私もついていくわ！」

天「ゴン？それは本当か？いやしかしいくらなんでも相手はまだ学生で女の子だぞ！」

大「大丈夫ですよ！先程の動き、海未さんならできますよ！なぜなら彼女は私にとって未来の・・・未来の・・・えっとその・・・」

ゴ「花？」

大「そうそう！それそれ！」

天「まったく呆れたやつだ！海未！お前はどうかんだ？本当に大丈夫なのか？」

海「ええ？その私は・・・握ったグリップを見つめながら決心したような眼差しで）できます！」

大「海未さん・・・ありがとうございます（海未の手を握りながら）」
その後・・・音ノ木坂学院屋上にて

ほ「えええええ！凜ちゃんに続いて海未ちゃんまでも仮面ライダーに？ずるいよ！天道さん、ほのかにもゼクター頂戴！」

天「ダメだ！あれはおもちやじゃないんだ！」

ほ「ううゝ凜ちゃんにはザビーゼクターあげた癖に．．ケチ！」
真「それにしても私たちの中で仮面ライダーが二人もいるなんて大丈夫なの？」

に「もはやスクールアイドルっていうよりスクールライダーって感じよね！」

凜「凜に続いて海未ちゃんまで変身しちゃうなんて！これは最終的にメンバー全が変身し．．」

絵「そんな馬鹿なこと言わないの！」

希「ううん．．流石にそれはないわ．．」

花「そうだよ凜ちゃん！私なんかが変身してもすぐタスケテってなっちゃうよ」

こ「私も変身して戦うのは．．ちよつとくアハハハ（．８．）」

天「あつ、そういえば海未。一つ聞きたいのだが」

海「はい！なんでしよう？」

天「『ラブアローシユート』ってなんだ？ドレイクの必殺技は『ライダーシユーティング』じゃ？」

海「ぬああああ／／」シユウウウウウ チーン

赤面し頭から煙が上がる海未．．そのまま失神して倒れた

ほ「あああああ！海未ちゃんが倒れた！」

絵「大変じゃない！！急いでストレッツチャーを．．」

こ「海未ちゃんしつかりくオロオロ オロオロ」

天「うん．．なんだ？」

そのころ、東京タワーにて

??「ううん？なんだここは？俺は一体？．．．」

鉄骨の上に独り言をしゃべるサソリ型のゼクターが現われて．．

t o b e c o n t i n u e

SS #6 「バイオレットスコピオン」

ナレーション「東條希……三年生。『μs』の名付親であり、タロットカードや水晶玉を用いて占いなどのスピリチュアルな事に興味がある少女。たまに神田明神で巫女のアルバイトをしている彼女なのだが……」

サツ サツ サツ サツ

ある日の朝、神田明神脇にある『男坂』の石段で掃き掃除している希

希「うん！今日はこんなとこやね！もうじきほのかちゃんたちが朝練しに来るやろし、うちも準備せんといかんなあ。それにしても次のライブの事考えなアカンのに、凜ちゃんに続いて海未ちゃんまで変身して、うちのアイドルとしての方向性おかしな事になりそうやわ」
??「ライブ？アイドル？それはどのこの国のヌードル（麺）なんだ？」

希「え？アイドル言うたらライブするに決まっ……あれ？確かに今声が……」

??「おお！やはり君には俺の声が届いているようだな！こっちはこっち！」

謎の声に呼ばれて辺りを見渡す希の目

希「ええと……こっちってことは……え？まさかこれ？これって、サソリ？いやでもただのサソリちゃうな。なんか天道さん等が言うところの『ゼクター』？」

希の目の前にはサソリ型のゼクター、『サソードゼクター』が。

??「なんと！君は天道の知り合いなのか？」

希「そうですけど……ええと、失礼ですけどあなたは？」

剣「俺の名前は『神代 剣』。その名のとおり『神に代わって剣を振るう男』だ！君は？」

希「うちは東條希！ここから近い音ノ木坂学院に通う三年生です。」
剣「東條希……いい名だ！今日から君の事は『ノゾミーヌ』と呼ばせてくれ」

希「えええ？ノゾミー又って？．．でもまあええか．．それより天道さんのお知り合いなんですか？」

剣「そうだとも！今はこんな形だが、俺も天道と同じライダーとして共にワームとして戦っていたんだ！それが気づいたら自分が使っていたゼクターに自分になつてしまったのだ」

希「そういうことだったんですねえ！でも普通、人間がゼクターになることがあるもんなん？」

剣「いや！これでも俺は一度死んでいてだなあ、どうやら俺の魂がこのサソードゼクターに入り込んでしまったようだ！ハハハハ」

希「いやいやいや！笑い事やないやん（それより一度死んでるって．．）でも魂がに移りこむなんて、なんかとってもスリチュアルやね」

ゼクターと会話する希。端から見ると非常にシニールである．．．すると

シヤアアアアア

なんとワームが五体、希たちの周りを囲っていた。

希「ワーム？まだこんな生き残りが．．．どうしよう．．．」

剣「ワームか！いいだろう。すべてのワームは俺が倒す．．．てこの姿ではどうにも．．．そうだノゾミー又、すまぬが力を貸してくれ！」

希「えっ？そんないきなりどうしろ？って．．．」

そう言う剣（サソードゼクター）が希の肩に止まり．．

希（剣）「おお！やはり俺の思ったとおりノゾミー又の身体に入れたぞ！」

希（ええええええええ？うちどうなつてしもうたん？）

するとどこからでてきたのか？希（剣）の左手には変わった形状の剣『サソードヤイバー』が握られていて

希（剣）「大丈夫だノゾミー又！俺を信じろ！」

すると希の肩に乗ったサソードゼクターを右手で掴み

希（剣）「変身！」

ギューーン ガチャ

《《HEN—SHIN》》

サソードゼクターをサソードヤイバーにセットし、希の身体は銀色の鎧が覆われ戦士の姿へと変えた

希(この姿、これってうちも仮面ライダーに変身してもうたん!!)
希(剣)「そういうことだ! さあ行こうゾミーヌ! 俺と一緒に踊ってはいくまいか? なんてな・ウオオオオオオ!」

つと叫びながらワームに斬りかかる希(剣)。

シャキイイイイン シャキイイイイイン

希(剣)「ウウウ! ハアアアア!」

希(うわあ! この姿こんなこともできるんやあ)

体中のアーマーに備え付けられてるチューブを伸ばしワームにダメージを与える。そしてゼクターの尻尾を倒す。すると体中のアーマーが一気にせりあがり

希(剣さんこれはもしかして『あれ』ですか?)

希(剣)「おお! どうやらこれも知っているようだな! では共に叫ぼう!」

希(剣)「キャストオフ!」

《CAST OFF》

チュドーン バン

アーマーが一気に弾け飛びワームに向けて射出され・・・

《CHANGE SCORPION》

アーマーがパージされスマート否、やけにセクシーで艶やかなバイオレットの剣士が姿を現した

♪♪BGM 純愛レンズ♪♪

希(この姿が・・・剣さん?)

希(剣)「これが『サソード』の真の姿・・・ってちよつと胸元が窮屈な気が・・・」

希(なっ／＼／＼・・・失礼な・・・それよりも行きますと! 剣さん!)
そういういつも戦いに意欲的になりつつある希

希(剣)「ああ! 行こうゾミーヌ!」

希(剣)「ハアアアアア!」

さらに激しい剣戟でワームを攻撃する希（剣）！ワームたちにダメージを与え続けた後、必殺技に入るサソード！一度ゼクターの尻尾を起こし、再び倒す

希（剣）「ライダースラッシュユ！」

《《RIDER SLASH》》

ゼクターから剣先の刃にエネルギーが注ぎ込まれ、ポイズンブラッドが滴り落ちる

希（ライダースラッシュユ？…そうかこれが必殺技やね！なんかすつごく面白そう！）

最初はライダーやワームに関して不安がってた希。しかし今ではすっかりノリノリである（コレデイイノカ？）

希（いづくでえゝワーム！…希パワー！たゝつぷり注入！はゝい、プシュツ！）

希（剣）「ハアアアアア！」

ワーム五体に向かってサソードヤイバーから光の刃状にした衝撃波を飛ばす！

グギャアアアアアア イタダキマシタアアアアアア
ドガアアアアアアン

悲鳴（と謎の言葉）をあげながら爆発するワーム達
戦いを終え変身解除する希

剣「やったなノゾミーヌ！」

希「うん！楽しかった！星が動きだしたようや☆
すると

天「希！」

ほ「希ちゃん!!」

希の危機を察して天道とほのか達が駆けつけた

こ「希ちゃん！ワームに襲われなかった」

海「天道さんからワームが現われたらしいと聞いて飛んできました」

凜「もし何かあったら凜がザビーに変身して戦うにやゝ」

花「えええ！それは止めようよ凜ちゃん…」

真「それよりワームはでなかったの？」

に「どうなの希？」

天「うん？・・・希？」

希(剣)「??おおおお！天道おおおお！久しぶりじゃないかああああ！」

天道に抱きつく希(剣)

天「っ!!なんだ??」

真「なっ／＼／ちよつと希！」

ほ「いきなりどうしちゃったの？」

希(剣)「会いたかったぞ！天道！かがみくんは元気か？ミサキー
又は今どこに？じいや・・・そうだ！じいやはどうしてる？」

天「お、お前まさか・・・剣？」

に「え？何、どういうこと？」

すると希に異変が

希「ぶはあくあつ、やっと戻れた。ごめん皆！うちに説明させて！
身体を取り戻した希が

天「・・・」

10分後・・・

μ s 「ええええええええ？」

海「希の身体に元ライダーである『神代剣』さん？の魂が乗り移つ
たと」

こ「それでそのまま仮面ライダーに変身したと？」

凜「これでμ sメンバー内で仮面ライダーが三人になったにや〜

♪テンション上がるにや〜

花「いいのかな〜こんな立って続けにスクールアイドルが変身なん
てしちゃって？」

真「いいわけないでしょ！天道、なんとかならないの？」

天「・・・神代剣の魂がソードゼクターにか・・・」

剣「天道・・・やはりゼクターのままでは俺の声は届かないようだ
なノゾミーヌ」

希「ええ、そうみたいやね」

剣「それよりノゾミーヌ！君に折り入って頼みがある」

希「え？」

剣（サソードゼクター）が希に対して依頼したいこととは？

・・・そしてその頃ほのかは

ほ「モグモグ　モグモグ　なんだよ！凜ちゃん、海未ちゃんに続いて希ちゃんまでえく私だつて変身したいのに・・・モグモグ・・・なんで私だけ・・・モグモグ・・・」

一人いじけて妬け食っていた・・・キョウモパンガウマイ

t o b e c o n t i n u e

SS #7 「再開！剣と加賀美と・・・」

ナレーション「神代剣・・・かつて仮面ライダーサソードして天道達と共にワームと戦ってきた資格者だった。だがその正体はサソリ型のスコルピオワームが擬態した姿だった。そしてワームの頂点として君臨した彼は意図的にカブトに倒されることで自分の力で『すべてのワームを倒す』という目的を果たすのだった・・・だがどういう成行きか死んだ剣（スコルピオワーム時の人格）の魂は自分が使っていたサソードゼクターに乗り移りスクールアイドルである東條希と出会い、彼女をサソードの後継者として変身させた。そして剣は再開した天道にある依頼をする・・・」

神田明神

新「・・・希ちゃん・・・いや今は剣か？」

剣（希）に呼ばれ加賀美が神田明神に来ていた。希の肩にサソードゼクターが乗っているが、このときは希の身体に剣の人格が宿っている

希「ん？お：おとおお！我が友、カツガミイイイイイン！」

叫びながら加賀美に突進してくる希（剣）。それに驚き叫ぶ加賀美

新「わあああああ！希ちゃん！近い近い！」

希（剣）「いやあくすまない！久しぶりに会えてつい嬉しくてな！ハハハハ」

新「まったく・・・でもまた会えてよかったよ・・・剣」

しばらく二人はかつての戦いの思い出を語っていた。

希（剣）「そうかミサキーヌが我がデイスカビル家再興の為に働いてくれているのかあ」

新「ああ、今は海外で経営の拡大を狙って大忙しだそうだ！」

希（剣）「それはなににより、んでじいやは？じいやは来てないのか？」

新「ああ・・・それがだな・・・ちよつと都合がつかないみたいでな・・・」

希（剣）「・・・そうか・・・まあ確かに今のこの姿じゃじいやも困るしな・・・」

新「剣・・・けど・・・いつかきつと・・・きつと・・・」

